

にし おさ かべ にし はら い せき
西 刑 部 西 原 遺 跡

(G区)

平成27年1月

宇都宮市教育委員会

序

西刑部西原遺跡は、宇都宮市と上三川町に跨るインターパーク地内に所在する遺跡です。この周辺には砂田遺跡、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡遺跡、立野遺跡を含む「東谷・中島地区遺跡群」と呼ばれる大規模な集落跡があり、本遺跡もこの遺跡群の一部をなしています。また、古代の官道である推定東山道も確認されており、貴重な遺跡が密集している地域であります。

今回、株式会社北関東マツダの店舗建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、遺構の保存が行えない部分について、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、古墳時代後期の集落跡の一部が確認され、西刑部西原遺跡の他の調査成果とあわせ、遺跡の集落の変遷などを知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、今回の発掘調査で得られたこれらの成果をまとめたものであり、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで、多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 1 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫




例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市インターパーク4丁目2-2に所在する「西刑部西原遺跡（G区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社北関東マツダによる店舗建設に伴う事前調査で、独立行政法人 都市再生機構の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は同機構より委託を受けた株式会社日本埋蔵史研究所が実施した。
3. 調査は、平成26年7月15日～同年8月31日までとし、整理・報告書作成作業は平成27年1月31日まで行った。
4. 現地調査は水野順敏を担当者とし、柏崎広伸の協力を得た。整理・報告書作成作業は前記2名の他に、菅間智代・三輪孝幸・鈴木智子の協力を得た。本書の執筆・編集は「第1章第1節 調査に至る経緯」は宇都宮市教育委員会前原義之、「第4章 遺構と遺物」は水野・柏崎が分担し、他は水野が執筆・編集した。編集作業は鈴木協力を得た。分担執筆分は文末に筆者名を記す。
5. 空中写真撮影はJ・T空撮（高橋 純氏）、基準点測量は榎山真司土地家屋調査士事務所、重機土工事は有限会社大藤工業に委託した。
6. 調査組織
調査主体者・宇都宮市教育委員会
水越 久夫 教育長
赤石澤 亮 文化課長
岡地 宏 文化課長補佐
今平 利幸 文化課文化財保護グループ係長
前原 義之 文化課文化財保護グループ
調査実務者・株式会社日本埋蔵史研究所
菅間 裕二 代表取締役
水野 順敏 調査担当者（日本考古学協会々員）
柏崎 広伸 調査員（栃木県考古学会々員）
7. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
8. 現地調査、整理・報告書作成作業にあたって下記の関係機関及び各位よりご協力のご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。

独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部、株式会社北関東マツダ、栃木県教育委員会文化財課、篠原浩志、
篠原祐一、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、空間清公、丹治 剛（敬称略、順不同）

9. 調査参加者
石川義夫、入江晴江、入江通子、郷間久男、澤田邦子、菅野 繁、住谷 昭、長谷川健二、渡辺重夫（敬称略、順不同）

凡 例

1. 本遺跡名の略号は、県埋蔵文化財センター使用のものUT（宇都宮）-NS（西刑部西原）を踏襲し、宇都宮市の7区目であることから、G（G区）とし、各遺構の略号はSI（住居跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）で示す。
2. 第3図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『上三川』を部分複製し加筆した。第1図は参考文献5の付図を複製し加筆、第4図は参考文献12の第3図を再トレースし加筆した。
3. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図・断面図の水準線の数値は、海抜標高を示す。
4. 挿入の遺物番号は本文、写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□の前が住居跡番号、後が遺物番号である。
5. 遺構図のスクリーントーンは次の通りである。
 焼土・焼面  カマド構築材  攪乱、●は土器、○は石製品、■は鉄製品を示す。
遺物図断面のシメタは須志器を示す。遺構図に示す出土位置は挿入No.、複製表のNo.と合致する。
6. 土層・土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄編・著 2008『新版標準土色帳 30版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を使用した。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	7	IV 遺構と遺物	15
(1) 調査に至る経緯	7	(1) 竪穴住居跡	15
(2) 調査の経過	8	(2) 土坑	37
II 遺跡の位置と環境	9	(3) 溝跡	39
(1) 地理的環境	9	(4) 小穴	39
(2) 歴史的環境	9	V まとめ	49
III 調査の方法と調査の概要	13	(1) 土地利用の変遷	49
(1) 調査の方法	13	(2) 特色ある遺構・遺物について	49
(2) 基本順序	13		

表 目 次

第1表 SI-01 出土遺物観察表	第9表 SI-09 出土遺物観察表
第2表 SI-02 出土遺物観察表	第10表 SI-10 出土遺物観察表
第3表 SI-03 出土遺物観察表	第11表 SI-11 出土遺物観察表
第4表 SI-04 出土遺物観察表	第12表 SI-12 出土遺物観察表
第5表 SI-05 出土遺物観察表	第13表 小穴計測表
第6表 SI-06 出土遺物観察表	第14表 白玉計測表
第7表 SI-07 出土遺物観察表	第15表 網物鎌石計測表
第8表 SI-08 出土遺物観察表	

挿 図 目 次

第1図 調査区の位置と周辺の地形	第12図 SI-04・出土遺物, SI-05
第2図 試掘調査図	第13図 SI-05 カマド・出土遺物(1)
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡	第14図 SI-05 出土遺物(2)
第4図 西刑部西原遺跡調査区割図	第15図 SI-06・旧カマド・出土遺物
第5図 基本土層図	第16図 SI-07・出土遺物, SI-08
第6図 調査区全体図	第17図 SI-08 カマド・出土遺物
第7図 SI-01・出土遺物, SI-02	第18図 SI-09・出土遺物, SI-10・出土遺物(1)
第8図 SI-02 掘方・カマド・出土遺物(1)	第19図 SI-10 カマド・出土遺物(2), SI-11
第9図 SI-02 出土遺物(2), SI-03	第20図 SI-11 掘方・カマド・出土遺物(1)
第10図 SI-03 カマド・出土遺物(1)	第21図 SI-11 出土遺物(2)
第11図 SI-03 出土遺物(2)	第22図 SI-11 出土遺物(3), SI-12・出土遺物, SK-01 ~ 03, SD-01

図版目次

- 図版 1 A. 調査区全景空中写真(手前G区、奥H区、西より) B. 調査区全景空中写真(中央より右側奥の林までが本遺跡、北より)
- 図版 2 A. 調査区全景空中写真(東より) B. 調査区全景垂直写真 C. SI-05 垂直写真 D. SI-08・09・06・12 垂直写真
- 図版 3 A. SI-02・03・10・11 垂直写真 B. 調査区全景(北より) C. 調査区全景(南東より) D. 調査区全景南半部(南東より)
- 図版 4 A. 調査前の状況(北東より) B. 同前近景(北東より) C. SI-01 焼土確認状況(北より) D. 同前近景(北より) E. SI-01 完掘(南より) F. SI-01 完掘・土層(西より) G. SI-01 掘方(南より) H. SI-02・03 土層(左03・右02、西より)
- 図版 5 A. SI-02 完掘(南より) B. SI-02 掘方(南より) C. SI-02 カマド確認時(南より) D. SI-02 カマド完掘(南より) E. SI-02 カマド掘方(南より) F. SI-02・03 土層(左02・右03、南より) G. SI-03 完掘(左手前02、南より) H. SI-03 掘方(左手前02、南より)
- 図版 6 A. SI-03 貯蔵穴(南より) B. SI-03 カマド確認時(南東より) C. SI-03 カマド内の土器(南より) D. SI-03 カマド内の土器(南東より) E. SI-03 カマド完掘(石は支脚、南より) F. SI-03 カマド掘方(南より) G. SI-04 完掘(南より) H. SI-04 掘方(南より)
- 図版 7 A. SI-05 完掘(南より) B. SI-05 土層(南より) C. SI-05 掘方(南より) D. SI-05 張り出しピット(南より) E. SI-05 遺物出土状態(南より) F. SI-05 張り出しピット遺物出土状態(南より) G. SI-05 北東の白玉出土状態(南より) H. SI-05 張り出しピット脇の網物礎石(南より)
- 図版 8 A. SI-05 カマド確認時(南より) B. SI-05 カマド完掘(南より) C. SI-05 カマド焚口部(南より) D. SI-05 カマド掘方と焚口部石材(南より) E. SI-05 カマド掘方(南より) F. SI-05 カマド脇鉄器出土状態 G. SI-06・12 土層(南より) H. SI-06 土層(東より)
- 図版 9 A. SI-06・12 完掘(右06・左12、南より) B. SI-06・12 完掘(左手前12、西より) C. SI-06・12 掘方(右06・左12、南より) D. SI-06・12 掘方(左手前12、西より) E. SI-06 旧カマド完掘(西より) F. SI-06 旧カマド掘方(西より) G. SI-07 完掘(南より) H. SI-07 完掘(西より)
- 図版 10 A. SI-08 土層(東より) B. SI-08 完掘(南より) C. SI-08 カマド確認時(南より) D. SI-08 掘方(南より) E. SI-08 遺物出土状態(南東より) F. SI-08 土層の遺物出土状態(南より) G. SI-08・09 土層(北より) H. SI-09 土層(北より)
- 図版 11 A. SI-09 完掘(南西より) B. SI-09 カマド確認時(手前SD-02、南より) C. SI-09 カマド土層(南西より) D. SI-10 土層(西より) E. SI-10 土層(南より) F. SI-10 完掘(南より) G. SI-10 掘方土層(南より) H. SI-10 貯蔵穴・遺物出土状態(南より)
- 図版 12 A. SI-10 遺物出土状態(南より) B. SI-10 遺物出土状態(南より) C. SI-10 カマド完掘(南より) D. SI-10 カマド掘方(南より) E. SI-11 土層(西より) F. SI-11 土層(北より) G. SI-11 完掘(南より) H. SI-11 掘方(南より)
- 図版 13 A. SI-11 掘方(西より) B. SI-11 遺物出土状態(南より) C. SI-11 遺物出土状態(南より) D. SI-11 カマド土層(南西より) E. SI-11 カマド土層(北東より) F. SI-11 カマド完掘(南より) G. SI-11 カマド軸断面(南より) H. SI-11 カマド掘方(南より)
- 図版 14 A. SK-01・P-14 完掘(南より) B. SK-01 土層(南より) C. SK-02 完掘(南より) D. SK-02 土層(西より) E. SK-03 完掘(南より) F. SK-03 土層(南より) G. SD-01 完掘(東より) H. SD-01 土層(南より)
- 図版 15 A. SD-02 土層(西より) B. P-16 土層(北より) C. P-16 完掘(北より) D. P-21A・B 完掘(西より) E. 基本土層 調査区東(西より) F. 基本土層 調査区東近景(西より) G. 調査状況(南東より) H. 調査状況(北東より)
- 図版 16 SI-01～03 出土遺物
- 図版 17 SI-03～05 出土遺物
- 図版 18 SI-05 出土遺物(2)
- 図版 19 SI-06～08 出土遺物
- 図版 20 SI-09～11 出土遺物
- 図版 21 SI-11 出土遺物(2)

I 調査に至る経緯と経過

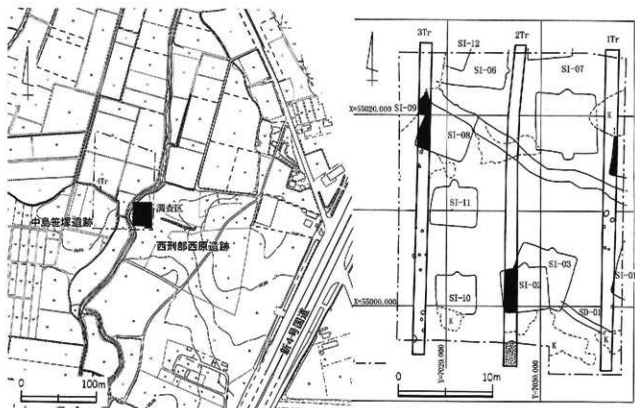
(1) 調査に至る経緯 (第1・2図)

平成26年2月17日付けで、株式会社北関東マツダ 代表取締役 久保田博文氏より宇都宮市インターパーク4丁目2-2の西刑部西原遺跡(県番号 4354)及び中島笹塚遺跡(県番号 4355)内での店舗及び自動車修理工場建設に伴い、文化財保護法第93条の申請が提出された。同日付で市教育委員会文化課(以下、市文化課)から県教育委員会文化財課(以下、県文化財課)へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が2月24日付けであったため、事業者代理人であった株式会社エムエスピー店舗開発機構を通じて事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、3月25日から27日まで実施した。調査の方法は、西刑部西原遺跡地内で建物建設が予定されている場所に、T-1からT-3(いずれも長さ約34m、幅約1.5m)の3本のトレンチ、また中島笹塚遺跡地内で建物建設が予定されている場所にT-4(長さ約8m、幅約1.5m)のトレンチ、計4本を設定し、遺構の有無を確認した。

調査の結果、西刑部西原遺跡地内のT-1、T-2及びT-3において、堅穴住居跡6軒のほか、土坑や柱穴を確認し、遺物では土師器の甕2点のほか、土師器片が出土した。遺構は、現地表面から約1.5~2m掘り下げた面で確認され、土師器片が出土していることや周辺の遺跡調査等から古代の遺構と考えられた。なお、中島笹塚遺跡地内のT-4においては、遺構、遺物ともに確認されなかった。

この調査結果を3月31日付けで事業者側に通知し、事業者および土地所有者である独立行政法人 都市再



第1図 調査区の位置と周辺の地形



第2図 試掘調査図

生機構(以下、UR都市機構と記す)と協議した結果、工法等の事業計画の変更は難しいとの結論に至ったため、西刑部西原遺跡地内において記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査に関しては、UR都市機構が費用を負担することとなり、6月9日付けで宇都宮市教育委員会教育長 水越久夫と埋蔵文化財発掘調査に関する覚書の交換を行った。

発掘調査は、市教育委員会が調査主体となり、株式会社日本窯業史研究所が現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成26年7月15日より準備に取り掛かり、同月21日に着手、同年8月31日まで実施した。

7月21日に器材の搬入、調査区の位置出しと草刈を行う。翌22日に、仮設施設、重機(0.7㎡BH)の搬入を行い、表土除去を開始する。調査範囲は約800㎡であるが、整地により遺構確認面まで1.7mの深さとなっており、東と南が地区外となる為、残土の移動に手間取り28日に終了した。この間、7月23日から人力による遺構確認に入り、25日からは遺構の調査に着手した。26日にはGPSを使用して測量基準点の設定を実施した。しかし、ここ東谷・中島地区遺跡群は調査の着手が2000年以前で、過去の成果と整合させる為には日本測地系を使用する必要がある。そこで、現地調査は世界測地系で記録し、後に日本測地系の座標に変換することとした。

試掘調査では計6軒の竪穴住居跡が確認され、全体では12軒程の竪穴住居跡が存在すると予測されていた。調査の進捗に伴い重複や部分的なものも含め計12軒の竪穴住居跡が確認された。順次調査を進め、遺構がほぼ出揃った8月11日には市文化課の赤石澤課長、岡地課長補佐、文化財保護グループの今平係長らの視察があった。同月25日にラジコンヘリを利用して、全景及び細部の空中写真撮影を行う。28日には事業主体者のUR都市機構首都圏ニュータウン本部の奥田チームリーダー、森主幹、調査主体者の市文化課前原氏による終了確認を受ける。その後、補足調査、撤収、埋戻し作業を行い8月31日に野外調査を終了した。

II 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境 (第1・3図)

本調査区は、宇都宮市インターパーク4丁目2-2に所在する。UR都市機構が宇都宮市と上三川町に跨る約137haの地域において実施する「東谷・中島地区土地区画整理事業」地内に所在し、同地区に点在する10数ヶ所の遺跡及び古墳群は「東谷・中島地区遺跡群」と総称される。本遺跡はこの事業地の北東部に位置し、今次調査区はその北西端にあたる。

遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県のほぼ中央部に位置するとともに関東平野の北端にあたり、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端部に立地している。この為、山地から平野部への転換点にあたり、市域の北～北西は山地に囲まれ、東～南部は平野部が広がる。

また、市域を南流する鬼怒川や同水系の田川・姿川などにより南北に細長く低地と台地が交互に形成されている。これらは東側から、鬼怒川低地、岡本・磯岡台地、田原・願成寺台地、田川低地、神主台地、宇都宮・祇園原台地、姿川低地、国谷台地と名称されている。

本遺跡は、このうち東側の中段段丘岡本・磯岡台地の西縁に立地し、西を南流する無名瀬川(田川用水ともいう)を隔てた西は田川・願成寺台地(下位段丘面)となる。

かつては水田や畑地の間に平地林が点在する田園地帯であったが、区画整理事業により様変わりした。緩やかな比高であったが比較的起伏に富んだ地形は、画一的な平地となり低地部分は埋め立てられている。今次調査区は現在1.6m程の盛土によって平地地となっているが、直ぐ西を前記の無名瀬川が流れていたことから地山は西に向かって下降し、遺構確認面での標高は85.6m程であった。

交通的にはJR東日本宇都宮駅の南方約7.5kmに位置し、南方約1kmに北関東自動車道宇都宮上三川インターが設けられ、東方約150mを国道新4号線が南北に、北方約700mを宇都宮環状線(国道121号線)が東西に通るなど自動車交通の要衝である。近年、北関東自動車道が群馬県から茨城県まで全線開通したこともあり、大規模商業施設や各種の工場、流通業務施設などの建設が進み、周辺環境の変貌は著しい。

(2) 歴史的環境 (第3・4図)

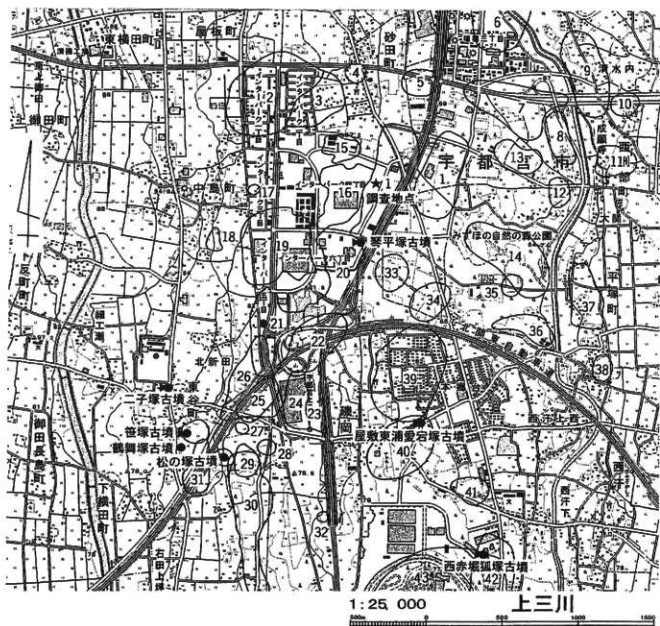
当地周辺は本区画整理事業をはじめ、北関東自動車道や宇都宮環状線等の建設、各種民間開発などに伴い多数の発掘調査が実施され多大な成果があげられている。旧石器時代から中・近世にわたる各種の遺構あるいは遺物の発見はあるものの、古墳時代中期以降の遺跡の増大が一つの特徴と言えよう。近隣遺跡について以下に概観する。

旧石器時代 立野遺跡(19)、磯岡遺跡(22)や本遺跡内の過去の調査区において遺物の出土があった。

縄文時代 本遺跡群では草創期～晩期にわたり全般の遺物の出土はあるが、大きな集落の形成は無かったようである。本遺跡の過去の調査区で落とし穴状土坑が確認されている。今次調査区でも縄文時代と推定される土坑や石鏃の出土が見られた。

弥生時代 この時期の遺構は明確で無いが、本遺跡の過去の調査区や砂田姥沼遺跡(15)において後期の土器の出土があった。

古墳時代 前期の遺構は砂田姥沼遺跡で3軒の竪穴住居跡が確認されているが、集落と言える状況のものでは無い。なお、該期の古墳としては田川を隔てた南西約4kmの茂原古墳群に長さ36～63mの前方後方墳



- 1 西刑部西原道跡 2 砂田遺跡 3 砂田滝道跡 4 砂田東道跡 5 上横田A遺跡 6 瑞穂野団地遺跡
- 7 大岡台道跡 8 小屋原道跡 9 藤腰道跡 10 成願寺道跡 11 榎戸道跡 12 後尚塚道跡 13 中道遺跡
- 14 小屋原高塚群 15 砂田鈍沼遺跡 16 中島笹塚遺跡 17 赤沢高塚群 18 芋内遺跡 19 立野遺跡 20 磯岡北道跡
- 21 桜稲荷古墳 22 杉村遺跡 23 磯岡遺跡 24 磯岡北道跡 25 原道跡 26 権現山道跡 27 原古墳群
- 28 車塚古墳群 29 権現塚古墳群 30 上石田古墳群 31 百目鬼遺跡 32 磯岡B道跡 33 西沼遺跡
- 34 内野遺跡 35 不動遺跡 36 下小屋原遺跡 37 平塚原根岸遺跡 38 南浦遺跡 39 西赤堀遺跡
- 40 磯岡・西汗の古墳 41 西赤堀東道跡 42 西赤堀南道跡 43 上郷古墳群

第3図 遺跡の位置と周辺道跡

が3基所在し、当地の聖的存在と見られている。

中期に入ると、田川・願成寺台地を中心に大規模な集落が営まれるようになり、遺跡群内でも、砂田遺跡(2)、砂田姥沼遺跡、立野遺跡などで竪穴住居跡が確認されている。また、本遺跡の南西約2kmに該期の大型前方後円墳の笹塚古墳(県指定史跡)がある。全長約100mで二重周溝を廻らし、中期古墳としては県内最大級で首長クラスの古墳と考えられる。さらに、本遺跡の西方約4.5kmには全長96mの前方後円墳の塚山古墳があり、笹塚古墳の後継的存在と見られている。

後期になると田原・願成寺台地から東側の岡本・磯岡台地へと集落の拡散が見られ、拠点的な比較的規模の大きな集落跡として、砂田遺跡、立野遺跡、原遺跡(25)、成願寺遺跡(10)、杉村遺跡(22)、赤塚遺跡(39)、磯岡遺跡(23)、権現山遺跡(26)など多数知られる。

しかし、後期の大型前方後円墳は小山の摩利支天塚や琵琶塚、壬生町の吾妻古墳など小山市・下野市から壬生町にかけての県南地域へと分布が変わる。本遺跡群内でも、現状保存された二重周溝をもつ琴平塚古墳(外側周溝外縁の全長72.6m)が築造されるが、首長墓規模のものは見られなくなる。

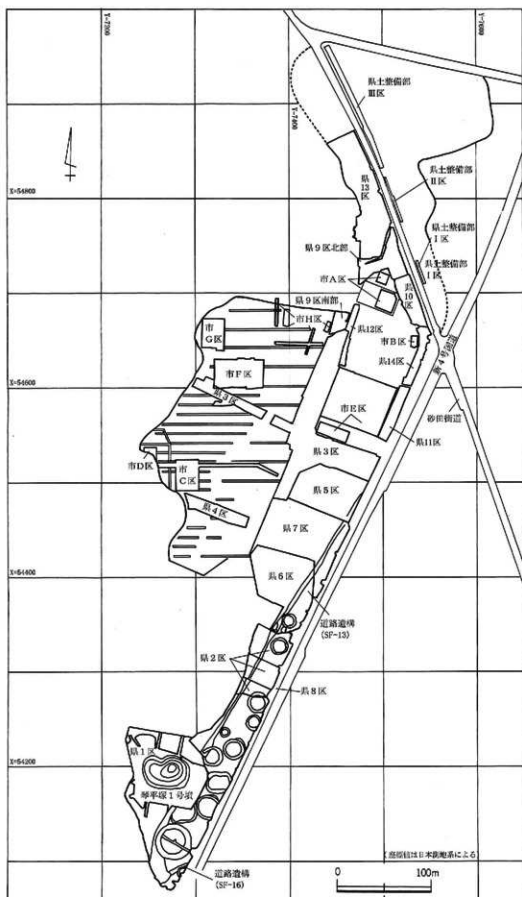
奈良・平安時代 律令制下における当地は、下野国河内郡に属し、現在も東刑部・西刑部の地名がのこることから「和名類聚抄」に記された刑部郷の比定地とされる。該期の遺跡はさらに増大し、本遺跡もこの時期に集落のピークを迎えるようである。

和名類聚抄によれば、河内郡は11郷を管する中郡ではあるが、東国における仏教普及の拠点として戒壇院が設けられた下野薬師寺が所在する。国府及び国分二寺は西隣の都賀郡に所在するものの、この河内・都賀両郡が古代下野の中心的地域であったことは明白であろう。

なお、当郡では官衙跡及びその要素の高い遺跡が西下谷田遺跡、上神主・茂原官衙遺跡(国指定史跡)、多功遺跡の3ヶ所あり、これらは本遺跡より南西方4～7.5kmに所在する。西下谷田遺跡は他の二者よりやや先行することから「評家」、上神主・茂原官衙遺跡は政庁と倉院を備えた「郡家」、後に政庁が多功に移転し倉院のみが機能したと考えられている。なお、多功遺跡は大規模な倉院は確認されているが、政庁は未確認である。

また、この上神主・茂原官衙遺跡の東脇で確認された古代東山道跡と見られる道路跡は宇都宮市と上三川町の行政境を北東に進み、杉村遺跡及び本遺跡へと至る。

中世 この時期の遺構は立野遺跡、砂田姥沼遺跡、砂田瀧遺跡、権現山遺跡などで、土坑、井戸跡、溝跡、方形竪穴などが調査されている。本遺跡の過去の調査で遺構は確認されなかったが、鎌倉時代の和鏡(群蝶双雀鏡)が出土している。



第4図 西刑部西原遺跡調査区割図

Ⅲ 調査の方法と調査の概要

(1) 調査の方法

遺構確認面までは重機による表土除去作業を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。確認した遺構は、基本的に竪穴住居跡は4分割（重複の場合は適宜ベルトを追加）、土坑、小穴類は半載して土層観察、記録した。セクションベルトを除去後、写真撮影、実測を行う。この後カマドの切解、記録、掘方の調査記録を行った。実測は土層・カマド・遺物出土状態は手実測、遺構平面図及び遺物出土位置はトータルステーションにより座標を測定、人手で作図した。縮尺は20分の1を基本とし、カマドと遺物出土状態の詳細図は10分の1、全体図は100分の1で作成した。

写真は35mm版で白黒、リバーサルフィルムによって撮影、デジタルカメラで補足した。白黒フィルムとデジタル写真にはデータを記した黒板を撮影した。撮影には三脚及び大型脚立を使用し、空中写真は外注シラジコンヘリで撮影した。

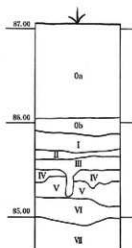
調査区の区画はGPSを使用して設定した世界測地系（第IX座標系）によるもので、後に日本測地系に変換し、過去の調査成果と合致させた（第4図）。

(2) 基本層序（第5図）

今次調査区は、既に区画整理事業に伴う整地が終了しており、旧地表面（水田か？）上に1.6m程の盛土が行われていた。また、盛土前に工事着手当時の地表面を整地したと見られる痕跡も確認された。土層観察は調査区東側の中程で行い、その柱状図を以下に示す。

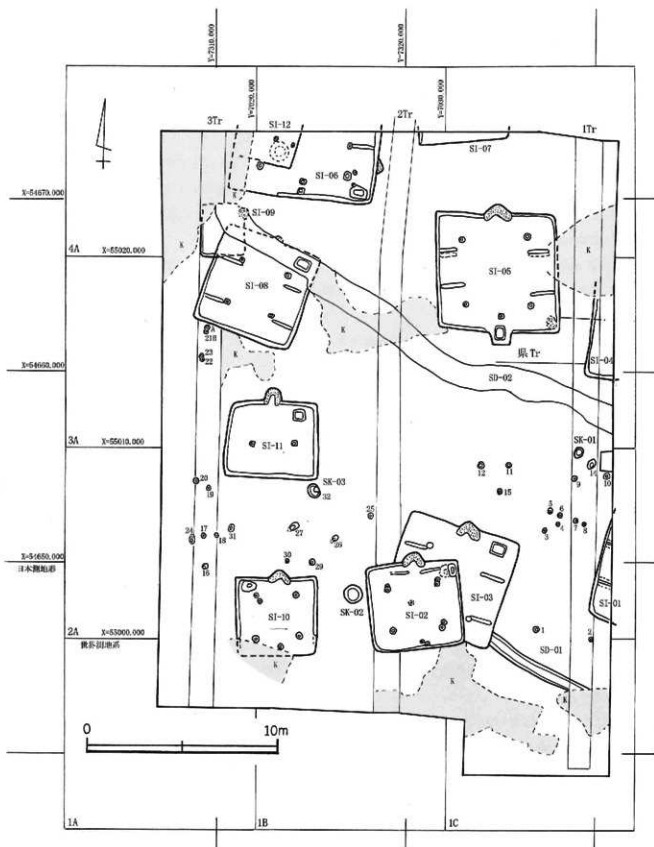
基本土層

- 0a. 褐色土 (10YR4/4)LB(10 ~ 200 mm) 主体、糞・ゴミを含む。工事盛土。
- 0b. 暗褐色土 (10YR3/3)LR・LB(1 ~ 30 mm)10%含む。工事前整地土。
- I. 黒褐色土 (10YR2/2)LR(1 ~ 3 mm) 微量含む。
- II. 黒褐色土 (10YR3/2)LR(1 ~ 10 mm)、IP(1 ~ 8 mm) 微量、にぶい黄褐色土 (10YR4/3)20%含む。
- III. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黒褐色土 (10YR3/2)R・B(5 ~ 30 mm)25%、IP・SP(3 ~ 5 mm) 所々に点在する。
- IV. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)LR・LB(1 ~ 40 mm)30%、灰黄褐色土 (10YR4/2)R・B(1 ~ 30 mm)15%、IP・SP(2 ~ 5 mm) 微量含む。ローム漸移層。
- V. 明黄褐色土 (2.5Y7/6)、赤褐色 (2.5YR4/8)R(1 ~ 10 mm) 微量、浅黄色土 (2.5Y7/3)R・B(1 ~ 40 mm)20%含む。締り強い。粘性あり。
- VI. 灰黄褐色土 (2.5Y7/2)、浅黄色土 (2.5Y7/3)30%含む。砂質で締り非常に強い。
- VII. 灰色土 (5Y6/1)、にぶい黄色土 (2.5Y6/4)、KP(2 ~ 10 mm) 微量含む。砂質で締り非常に強い。



第5図 基本土層図

なお、土層説明のLはローム、Sは焼土、Nは粘土で、Rは粒（1 ~ 10 mm）、Bは塊（10 mm以上）を示す。



第6図 調査区全体図

IV 遺構と遺物 (第6図)

今次調査で確認した遺構は、古墳時代後期～奈良時代初め頃の竪穴住居跡 12 軒、縄文時代の土坑 1 基、時期不明(概ね古代と推定)の土坑 2 基、溝 1 条、小穴 30 数基である。なお、調査区中程を東西に横断して北西に延びる SD-02 は土層・形状から耕作地の根切もしくは区画溝と判断されることから調査対象から除外した。

(1) 竪穴住居跡

SI-01

遺構 (第7図、図版 4A～G)

調査区東端の中央やや南寄り、2CGr に位置し、大部分は調査区外に所在する。北約 7 m に SI-04、西約 4 m に SI-03 が隣接し、調査内では重複関係は無かった。

平面形・規模は前記事項から不明である。西辺の現存長 5 m、南辺の同長 1.2 m、西壁際に確認された間仕切溝と南壁の位置関係から南北長は 5.5 m と推定される。西壁より推定される主軸方位は N-14°-E である。

壁は現存高 30 cm でほぼ直立する。壁下には幅 16～18 cm、深さ 6～8 cm の壁溝が設けられていた。また、西壁より内側に向かって延びる間仕切溝と考えられる幅 10～15 cm、深さ 6～8 cm の溝 (D1・2) を確認した。なお、これらはそれぞれ南と北に掘り直しが認められ、3 度目が中央の溝と判断される。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を多く含む土で整地されており、平坦で堅く締っていた。カマド、柱穴、貯蔵穴などは調査区内では確認出来なかった。

南西部の床面近くには 20 cm 程の厚さで焼土の遺存が認められ、火災住居跡と考えられるが、炭化材の遺存は無かった。

埋積土は 4 層に分けられ、下位は人為的、上位は自然埋没と考えられる。

出土遺物 (第7図、第1表、図版 16)

遺物はすべて土師器で、坏 (1～3) と手づくね土器 (4・5) があり、いずれも二次被熱を受けていた。

(柏崎)

SI-02

遺構 (第7・8図、図版 4H～5E)

調査区の南側の中程、1・2B・C 区に跨って所在し、北東が SI-03 と重複しこれを切る。西約 2.5 m に SI-10、東約 7 m に SI-01、北西約 6 m に SI-11 が隣接する。また、南辺東側が擾乱によって切られていた。

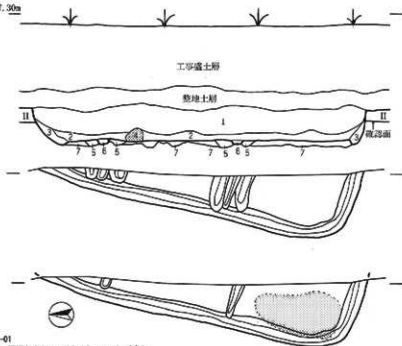
平面形・規模は、東西長 4.8 m、南北長 4.6 m のほぼ方形、北辺の中央にカマドを設けており主軸方位は N-6°-W を示す。

壁は現存高 40～48 cm でほぼ直立する。壁下には幅 13～20 cm、深さ 7 cm の壁溝が設けられ、カマド部分を除き圍繞していた。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を多く含む土で整地されており、平らで堅く締っていた。

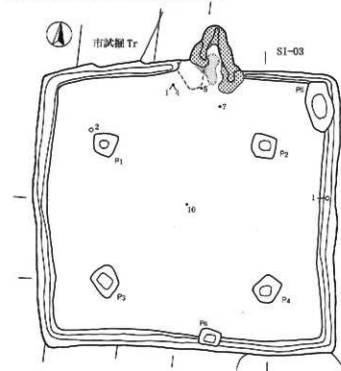
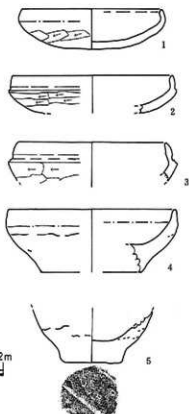
柱穴は P1～P4 の 4 基が主柱穴と考えられ、径 35～40 cm、深さ 35～60 cm である。北東隅の P5 は 80×40 cm の楕円形、深さ 30 cm で、所謂貯蔵穴と考えられる。南壁際の P6 は 35×23 cm の長方形、深さ 10 cm で出入口の施設と考えられる。

87. 30m



SI-01

1. 黒褐色土(10YR2/2.5LR(1~10mm)3%含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2.5LR(1~10mm)13%含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2.5LR(1~10mm)20%含む。
4. 黒褐色土(10YR3/3.5SR(1~10mm)30%含む。
5. 暗褐色土(10YR3/2.5LR-LR(1~20mm)30%含む、圓柱知源(前)埋土。
6. 暗褐色土(10YR3/2.5LR(1~10mm)15%含む。
7. 暗褐色土(10YR3/2.5LR-LR(1~60mm)40%含む、扇方埴土。

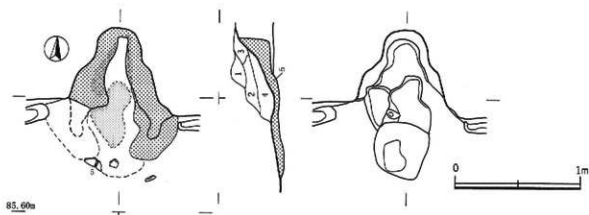


88. 70m

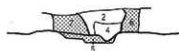
SI-02

1. 黒褐色土(10YR3/3.5LR(1~10mm)8%、棕色(2.5YR2/3.5R(1~2mm)少量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3.5LR-LR(1~40mm)15%、褐色(2.5YR2/4.0R(1~2mm)微量含む。
3. 黒褐色土(10YR3/2.5LR-LR(1~20mm)25%、褐色(2.5YR2/4.0R(1~5mm)少量含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2.5LR(1~10mm)20%含む。
5. 黒褐色土(10YR3/2.5LR(1~10mm)25%、棕色(2.5YR2/4.0R(1~2mm)微量含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2.5LR(1~10mm)15%含む。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2.5RB(1~10mm)各15%含む、カマドの掘山土。
8. 暗褐色土(10YR3/3)とLR-LR(1~100mm)の混合土(11(掘方埴土)。

第7図 SI-01・出土遺物, SI-02

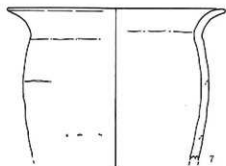
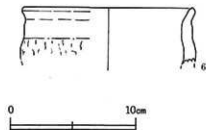
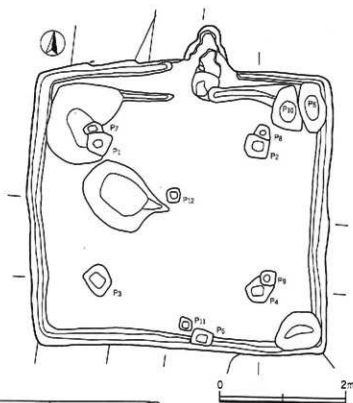
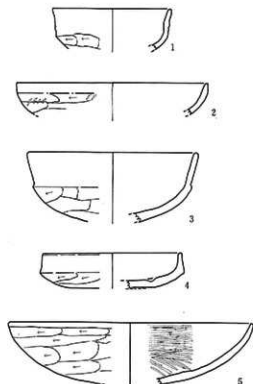


85_60a



SI-02カマド

1. 黒褐色土(10YR2/3)SR-SH(1~20mm)46%含む,
2. 暗褐色土(10YR3/3)SR-SH(1~25mm)36%, SR(1~5mm)10%含む,
3. 黒褐色土(10YR2/3)SR(1~5mm)15%, SR(1~10mm)20%含む,
4. 黒灰色N(10YR/1)主体, SR-SH(1~25mm)20%, 黒褐色土(10YR3/1)10%含む,
5. 黒褐色土(10YR3/3)LL-LB(1~25mm)15%, SR(1~10mm)5%含む,
7. 黒灰色土(10YR3/1)SR-SH(1~20mm)30%, SR(1~10mm)20%含む,



第8図 SI-02 振方・カマド・出土遺物(1)

カマドは、北壁の中程を幅 85 cm、奥行き 60 cm の逆 U 字形に切り込み、白色粘土で築かれていたが、SI-03 の埋積土中にあり、掘方はあまり明瞭で無かった。また、住居の廃絶時に破壊したのか遺存状態が不良で、支脚なども遺存しなかった。

床面下の調査により、最終時の北壁より約 20 ～ 50 cm 内側に北辺の壁溝を確認した。また、これに伴うと考えられる柱穴 P7 ～ 9、貯蔵穴 P10、出入口施設 P11 など認められ、拡張を伴う建て替えがあったと判断される。堅穴の中央に掘方底面で確認した P12 は、先行する SI-03 の南西主柱穴 (P3) である。

埋積土は 4 層に分けられ自然埋没と考えられる。

出土遺物 (第 8・9 図、第 2・15 表、図版 16)

遺物は大部分が土師器で、坏 (1～4)、皿 (5)、小型甕 or 鉢 (6・7)、甕 (8～10) の他、須恵器甕の口辺部片 (11) が 1 点出土した。また、礫を利用した網物鎌石が 3 点出土している。(水野)

SI-03

遺構 (第 9・10 図、図版 5F ～ 6F)

調査区の南側の中程、1C、2B・C に跨って所在し、南西は SI-02 と重複しこれに切られていた。南東に接して SD-01 を確認したが埋積土中にその痕跡が認められなかったことから、本跡の方が新しい可能性が高い。東約 4 m に SI-01、北約 10 m に SI-05、西約 4 m に SI-10、西北西約 5 m に SI-11 が隣接する。

平面形・規模は、現存部分で南北長 5.8 m、東西長 6 m の方形。北辺のほぼ中央にカマドが設けられ、主軸方位は N-18°-E を示す。

壁は現存高 33 cm でほぼ直立する。壁下に壁溝は確認出来なかった。なお、東壁側 2 条 (D2・3)、西壁側で 1 条 (D1) の間仕切溝と見られるものを確認した。幅 18 ～ 30 cm、深さ 8 ～ 12 cm、長さ 1.2 ～ 1.3 m で、D1 は P1、D3 は P4 に接するように設けられていたが D2 は P2 より約 30 cm 南側に寄る。これは P2 の北側に貯蔵穴があり、一定の空間を確保する為と推察される。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を主体とする土で整地されており、平坦で堅く締っていた。

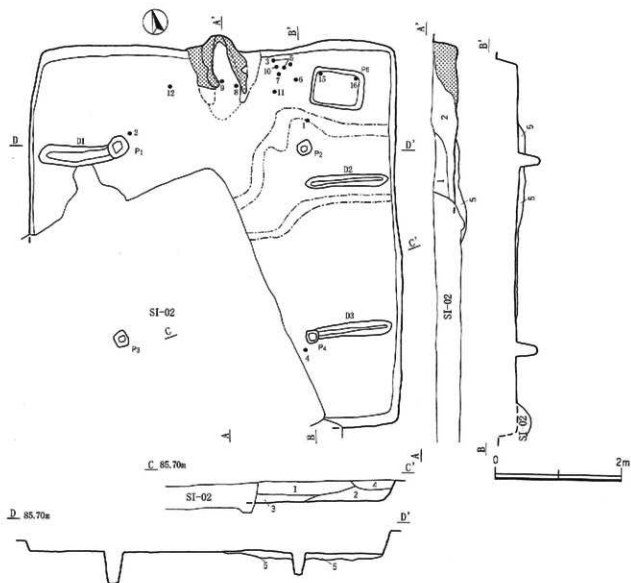
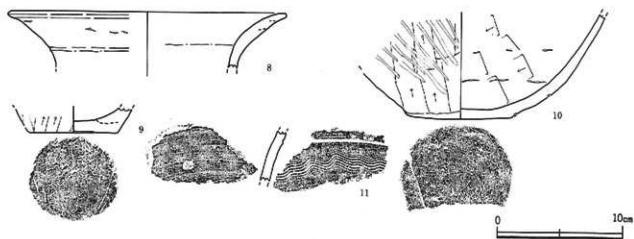
柱穴は P1 ～ P4 が主柱穴、P5 が貯蔵穴と判断され、出入口施設は SI-02 との重複により失われていた。主柱穴は径 20 ～ 30 cm、深さ 35 cm で堅穴の規模に比べ小振りであった。貯蔵穴は 84 × 64 cm の長方形で深さ 40 cm。貯蔵穴内にはほぼ完形の甕が 2 点 (15・16) 遺存していた。

カマドは北壁のほぼ中央に幅 80 cm、奥行き 30 cm の半円形に切り込み白色粘土で築かれていたが、大部分は堅穴内に所在する。本跡は住居の廃絶時にカマドの大規模な破壊が行われておらず、カマド内に土師器甕が 2 点 (13・14) のこされておられ、それぞれの甕の下には自然石の支脚が遺存した。甕は横並びにカマドに設置されていたと判断されるが、カマドの崩壊に際して移動し、右側は内側、左側は焚口側に倒れるような状態で遺存した。遺存状態からカマドは幅 50 cm、長さ 1.2 m 程であったと推察される。また、カマドの周辺には完形に近い土師器が多く遺存していた。また、礫を利用した網物鎌石が埋積土中より 3 点出土している。

埋積土は 4 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

出土遺物 (第 10・11 図、第 3・15 表、図版 16・17)

遺物はすべて土師器で、坏 (1～7)、手づくね土器 (8・9)、鉢 (11)、小型甕 (12)、甕 (13・14)、小型甌 (10)、甌 (15・16) などである。

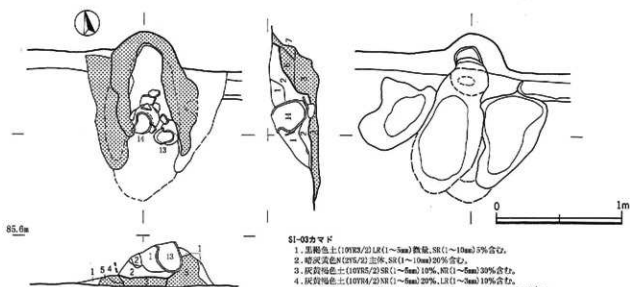


SI-02

1. 黒褐色土(10YR2/2)LR(1~10mm)5%、暗褐色土(10YR3/3)30%含む。
2. 暗褐色土(10YR2/4)LR・LR(1~60mm)30%含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2)LR(1~5mm)5%含む。

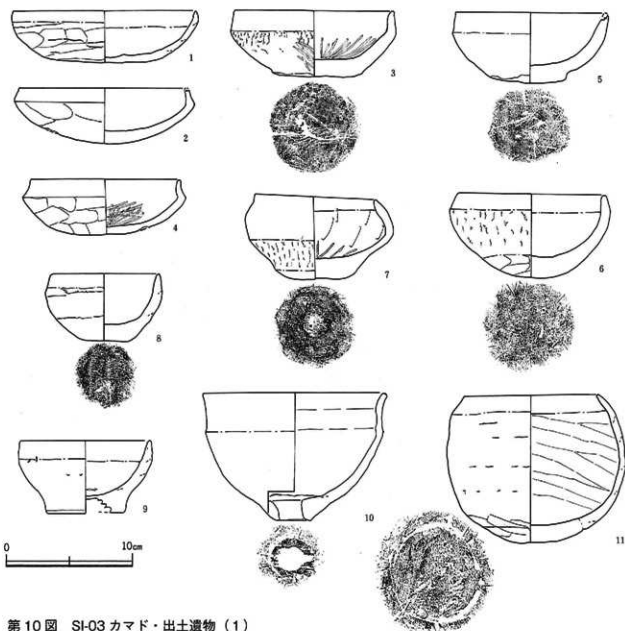
4. 黒褐色土(10YR2/3)LR(1~10mm)10%含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3)とLR・LR(1~100mm)の混合土(1:1(黒方黄粘土))。

第9図 SI-02 出土遺物(2), SI-03

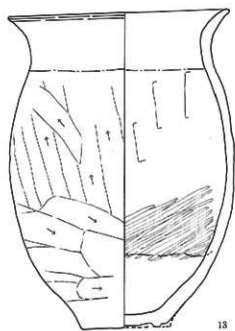


SI-03カマド

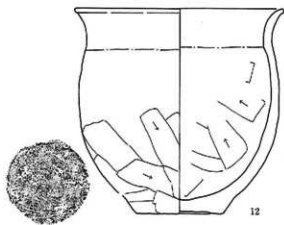
1. 黒褐色土(10YR5/2)LR(1~5mm)多数, SR(1~10mm)2%含む。
2. 暗灰黄色M(10YR5/2)主層, SR(1~10mm)20%含む。
3. 灰褐色土(10YR4/2)SR(1~5mm)10%, 硝(1~5mm)30%含む。
4. 灰褐色土(10YR4/2)SR(1~5mm)30%, LR(1~5mm)10%含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1)主層, 珪褐色土(10YR3/1)15%, LR(1~10mm)5%含む。
6. 黒褐色土(10YR3/1)SR(1~10mm)40%, SR(1~5mm)2%含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1)SR(1~10mm)30%, LR(1~10mm)15%含む。



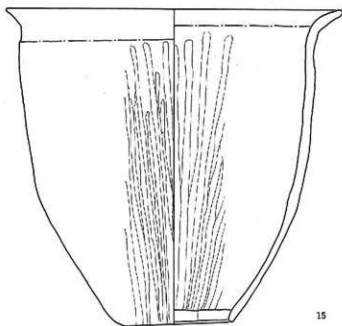
第10図 SI-03 カマド・出土遺物(1)



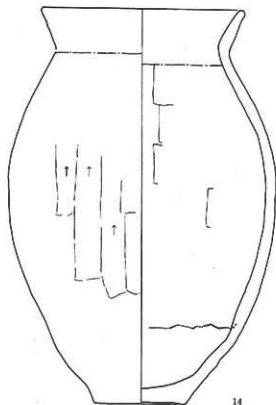
13



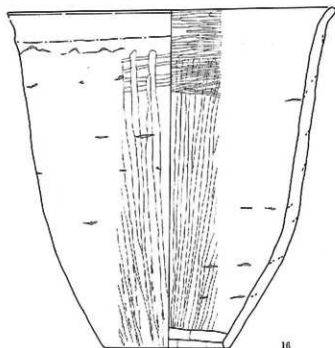
12



15



14



16

第11図 SI-03出土遺物(2)

SI-04

遺構 (第12図、図版6G・H)

調査区東端の中央やや北寄り、3CGrに位置し、大部分は調査区外に所在する。南約7mにSI-01、西約2mにSI-05が隣接する。調査区内で重複関係は認められないが、北側は擾乱に切られ、南側床面にも擾乱がある。また、南北土層断面に見られた擾乱状の掘り込みは墓壇文センターのトレンチであることが判明した。

平面形・規模は前記の状況から明確に難しいが、現存する西辺の南北長4.9m、同東西長1.5mである。西壁より推定される主軸方位はN-7°-Eを示す。

壁は現存高30cmでやや外傾する。壁下には幅20cm、深さ8cm程の壁溝が設けられ、壁遺存部全体に見られた。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を多く含む土で整地され、平坦で堅く締っていた。調査区内では、カマド、柱穴、貯蔵穴等は確認出来なかった。

埋積土は3層に分けられ、自然埋没と考えられる。遺物は埋積土中より土師器片が少量出土した。

出土遺物 (第12図、第4表、図版17)

遺物はすべて土師器で、坏(1)、壺(2・3)の小片が出土したのみである。

(柏崎)

SI-05

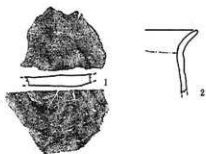
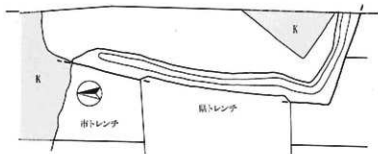
遺構 (第12・13図、図版7A～8F)

調査区の中央やや北東寄り、3・4B・CGrに所在する。東約2mにSI-04、北約3.5mにSI-07、南約10mにSI-03、西約9mにSI-08が隣接する。重複関係は無いが、北東と南西が擾乱によって切られていた。

平面形・規模は、南北長6.2m、東西長6.4mの方形で、南辺と北辺が僅かに東西にずれ、平行四辺形状となる。北辺の中程にカマド、南辺中程に所謂張り出しピットを設けており、主軸方位はN-1°-Wを示す。

壁は現存高5～18cmでやや外傾する。壁下には幅12～20cm、深さ5～10cmの壁溝が設けられ、カマドと張り出しピット部分を除き圍繞する。また、東壁際(D2・4)と西壁際(D1・3)より内側に向かって各2条の間仕切溝が認められた。幅18～32cm、深さ1.1～1.3cmでいずれも内側が主柱穴に連ならない。なお、D1とD2の南側に接して旧い間仕切溝D5・D6を確認し、東・西とも北寄りの間仕切に改造があったと考えられる。小穴、掘り込みは計6基確認し、主柱はP1～P4、張り出しピットがP5、出入口施設がP6と考えられる。主柱穴は径38～46cm、深さ35～40cmの円形。張り出しピットは80×54cmの長方形、深さ33cm、周囲に幅12～25cm、深さ8～13cmの浅い平場が設けられていた。内部にはほぼ方形の土師器甕が2点(12・13)遺存していた。また、張り出しピット周囲の床面が幅1～1.2mで高さ5～6cmの低い盛り上がり認められ、低い周堤帯が設けられていたと考えられる。このP5東脇の周堤帯上より、網物鏝石と考えられる細長い磯が12点程まとまって出土している。出入口施設と考えられるP6は32×24cmの長方形で深さ15cm、前記の周堤帯上に設けられていた。

カマドは、北壁の中程を幅45cm、奥行き30cmの半円形に掘り込み、灰白色粘土で築かれていたが、大部分は竪穴内に所在し、煙道部のみが壁外に設けられていた。このカマドは焚口部の構築材として、細長の河原石を使用しており、竪穴の壁より約70cm内側に2本の河原石が35cmの間隔をもって立てられてあった。石材の長さが異なることから、右側は深さ8cm程の小穴に埋め込み、左側は掘方底面に置き上端の高さを揃えてあった。住居の廃絶時に意図的に破壊されたと思われる、立柱の上に架け渡してあったと思われる石材が手前20cm程の所に落下し、破片の一部がカマドの右脇より出土している。また、その際抜き取られたのか

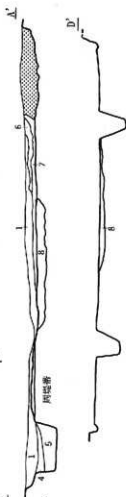
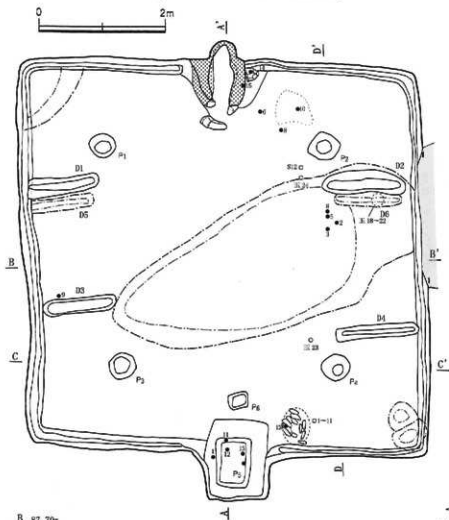
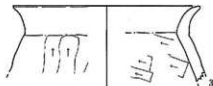


0.5m

SI-04

1. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~50cm) 30%含む。
2. 黒褐色土 (109R2/2) LR (1~30cm) SR (1~30cm) 雑質含む。
3. 黒褐色土 (109R2/2) LR (1~10cm) 40%含む。
4. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) 40%含む(礫方量多)。

工事掘土層



5. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~50cm) 30%層下記に多。
6. 黒褐色土 (109R2/2) 灰質褐色土 (109R2/2) R-L (1~40cm) 30%含む。
7. 黒褐色土 (109R2/2) LR (1~30cm) 20%、黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) 10%含む。
8. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) の割合より、10%層下記に多。

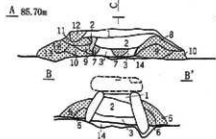
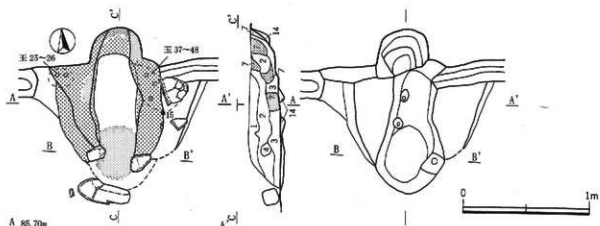
1. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) 15%含む。
2. 褐色土 (109R2/2) 灰質褐色土 (109R2/2) 20%含む。
3. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) 15%含む。
4. 黒褐色土 (109R2/2) LR-LB (1~30cm) 15%含む。

SI-05

B 0.70m

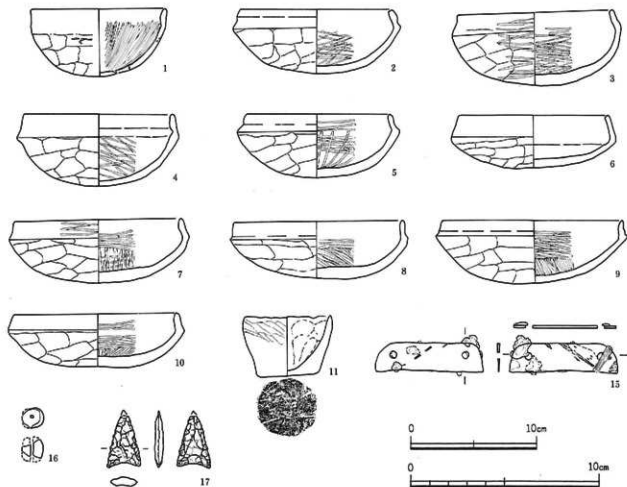
0 2m

第12図 SI-04・出土遺物, SI-05

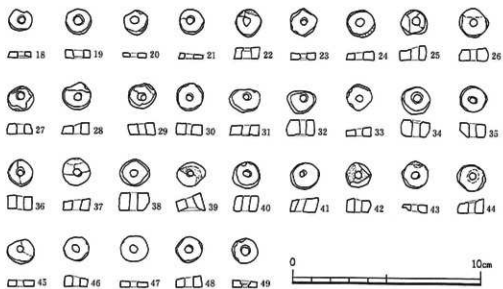
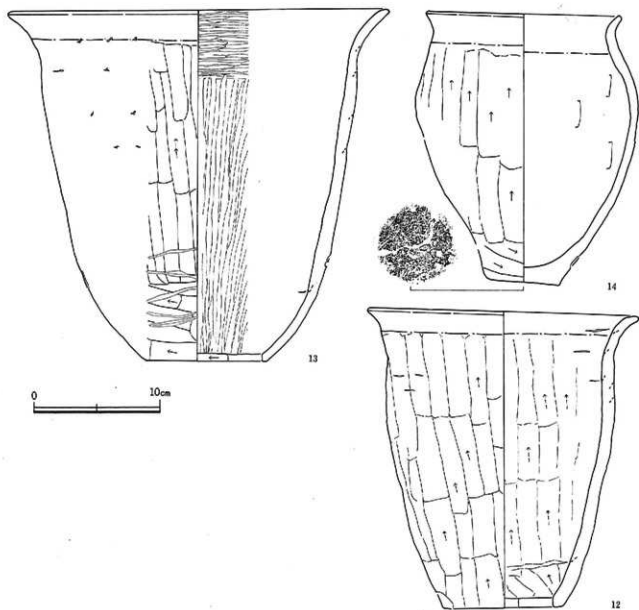


SI-05カマド

1. 黒灰色土(10YR5/1)層(1~2mm)5%、SR(1~40mm)40%含む。
2. 黒灰色土(10YR4/1)SR(1~10mm)8%、SR(1~10mm)20%含む。
3. 黒灰色土(10YR4/1)SR(1~10mm)20%、SR(1~10mm)15%含む。
4. におろ黄褐色(10YR6/4)SR、SR(1~2mm)散在含む。
5. 黒灰色土(10YR5/1)SR(1~10mm)15%、SR(1~10mm)10%含む。
6. におろ黄褐色(10YR6/3)主体、におろ黄褐色(10YR6/4)30%含む。
7. SR
8. 黒灰色(10YR5/1)主体、SR(1~6mm)20%含む。
9. 黒灰色(10YR5/1)主体、SR(1~10mm)25%、黒褐色土(10YR2/1)5%含む。
10. 灰黄褐色(10YR2/2)主体、灰黄褐色土(10YR4/1)40%、黒灰色土(10YR4/1)8%含む。
11. 褐色土(10YR2/2)主体、SR(1~10mm)8%含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2)層(1~2mm)15%、SR(1~2mm)散在含む。
13. 黒褐色土(10YR2/1)L-L(1~20mm)3%、SR(1~10mm)20%、灰黄褐色土(10YR2/2)15%含む。
14. 黒灰色土(10YR5/1)L-L(1~20mm)20%、黒褐色土(10YR2/1)15%含む。



第13図 SI-05カマド・出土遺物(1)



第14圖 SI-05 出土遺物(2)

支脚も遺存しなかった。焚口部はこれらの構築材から下幅 35 cm、上幅 20 cm、高さ 25 cm程で、カマドの全長は約 1 mと推定される。

埋積土は 8 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物は前記の張り出しピット周辺の他、カマド周辺及び東側の床面上より多数の土師器の他、白玉 31 点、土玉 1 点、鉄製品 1 点等の出土があった。殊にカマドの両脇からは 20 点以上の白玉と土玉、鉄製品が各 1 点出土しており、住居の廃絶に際して何らかの祭祀的行為が行われたものと考えられる。

出土遺物 (第 13・14 図、第 5・14・15 表、図版 17・18)

遺物は土師器を主体とし、白玉 31 点 (18～49)、土玉 1 点 (16)、鉄製品 1 点 (15) の他、礫使用の網物鎌石 11 点などである。土師器は坏 (1～10)、手づくね土器 (11)、甕 (12・13)、甕 (14) などがあり、ほぼ完形のものが多い。網物鎌石は幅 4.55～6.92 cm、厚さ 3.04～5.28 cm、長さ 11.83～19.7 cm で、平均重量は 667 g、最小の (12) を除くと 712 g であった。また、カマド付近より石鏃が 1 点 (17) 出土している。

(水野)

SI-06

遺構 (第 15 図、図版 8G～9F)

調査区の北端中央やや西寄り、4A・B 区に位置し、北半部は調査区外に延び、西側は攪乱によって失われていた。北西部に SI-12 が重複しこれに切られていた。東約 2 m に SI-07、南東約 3.5 m に SI-05、南約 0.5 m に SI-09、同 2 m に SI-08 が隣接する。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、現存南北長 3.6 m、同東西長 6.7 m で、柱穴と壁の位置関係から東西長は約 7.5 m と推定される。本来は一辺 7.5 m の方形で比較的大型の住居跡と思われる。東辺の南寄りに本跡の旧カマドもしくは先行する住居跡のカマドの一部が遺存していたが、北辺にカマドを想定した場合の主軸方位を東壁より推定すると、 $N-6^{\circ}-E$ を示す。

壁は現存高 25～35 cm でやや外傾し、壁下には幅 15～25 cm、深さ 5～10 cm の壁溝が設けられており、調査区内では東壁下と南壁下の中央から東寄りに認められた。西寄りには攪乱等によって失われた可能性が高い。また、東壁際より内側に向かって幅 20 cm、深さ 10 cm の間仕切溝が 1.2 m 延び、P3 に連なる。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊主体の土で整地しており、東側は平坦で堅く締っていたが、西側は攪乱によって削平を受けられていた。

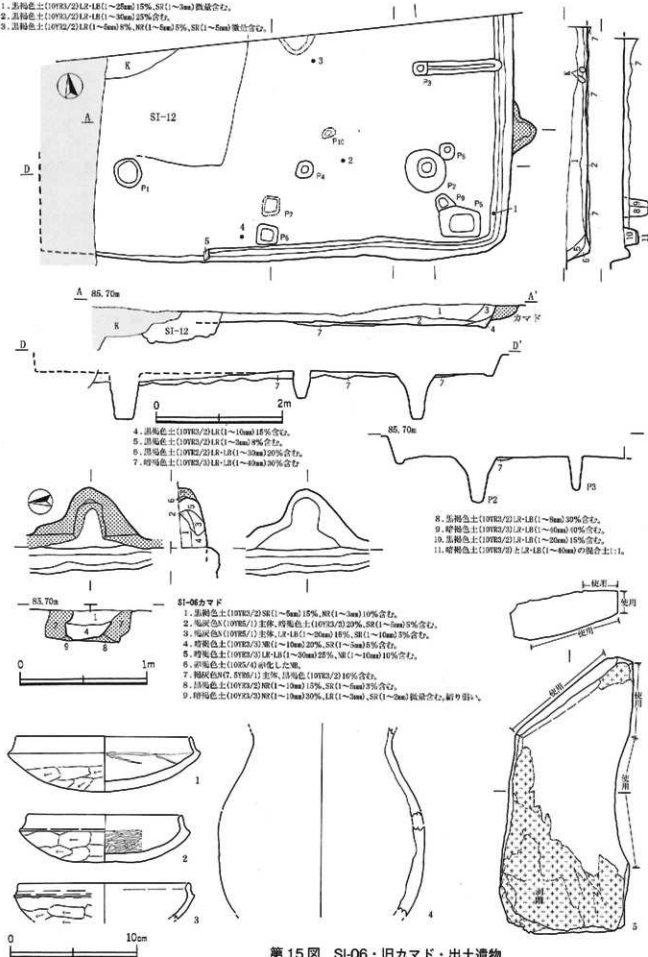
柱穴は P1 と P2 が主柱穴、P3 は間仕切用の柱穴、P4 も主柱穴の中間よりやや東寄りに位置するが、両者を結ぶ線上にあり関連の施設と考えられる。P5 は貯蔵穴、P6 は出入口施設と考えられる。P7 は古い出入口施設、P8～10 は性格不明。主柱穴の P1 は径 45 cm の円形で深さが推定床面より 70 cm、P2 は上面径が 65 cm の円形、中程で径 30 cm と狭まり、深さ 70 cm。間仕切用の P3 は径 20×25 cm の長方形で深さ 55 cm。P5 の貯蔵穴は 65×50 cm の長方形、深さ 40 cm で目立った遺物の出土は無い。出入口施設の P6・7 はともに一辺 28～35 cm の方形で、深さ 25～40 cm、新しい P6 が浅い。

カマドは南東隅より 1.7 m 北寄りに東壁を幅 90 cm、奥行き 50 cm 程切り込んで築かれていた。壁穴内には痕跡を止めず、本跡の旧カマドか先行する住居跡のカマドかは判然としないが、本跡の旧カマドと仮定する。遺存部分は煙道部と考えられ、奥に向かって 2 段に掘り込まれていた可能性が高い。

埋積土は 6 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物は南東隅の貯蔵穴脇よりほぼ完形の土師器坏 (1) が出土した他は埋積土中より土師器小片が少量、

1. 黒褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~25mm)15%, SR(1~5mm)微細混合,
 2. 黒褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~30mm)25%混合,
 3. 黒褐色土(10YR2/2)LR(1~5mm)9%, NR(1~5mm)9%, SR(1~5mm)微細混合,



第15図 SI-06・旧カマド・出土遺物

南壁際で大型の砥石（5）が1点、床面上より礫が2点出土した程度である。

出土遺物（第15図、第6表、図版19）

遺物は土師坏（1～3）、小型甕（4）と砥石（5）である。

（水野）

SI-07

遺構（第16図、図版9G・H）

調査区の北端中程、4B・CGrに位置し、大部分は調査区外に所在する。調査区内で重複関係は認められない。南約3.5mにSI-05、西約2mにSI-06が隣接する。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、南辺での東西長は4.6m、現存南北長0.8m、一辺4.6m程の方形かと推定される。西壁より推定される主軸方位はN-5°30'-Wを示す。

壁は現存高20～28cmでやや外傾し、東・南辺の壁下には壁溝は認められなかったが、西辺の壁下には幅15cm、深さ6cm程の壁溝が設けられていた。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を多く含む土で整地されており、ほぼ平坦で堅く締っていた。

カマド、柱穴、貯蔵穴等は調査区内では認められなかった。

埋積土は3層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物は南西隅の床面よりほぼ完形の土師器坏が1点出土した他は土師器の小片が少量出土したのみである。

出土遺物（第16図、第7表、図版19）

遺物は土師器のみで、坏（1・2）、甕（3・4）を図示した。

（水野）

SI-08

遺構（第16・17図、図版10A～G）

調査区の北西部、3A・B、4A・BGrに跨って位置する。北西部部分がSI-09と重複しこれを切っていた。北約3mにSI-06、東約6mにSI-05、南約2mにSI-11が隣接する。北辺は後世の溝SD-02に切られており、北東部にも攪乱があった。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、東西長5.2m、推定南北長5.1mの方形と考えられる。北辺の中程にカマドの痕跡があり、主軸方位はN-21°-Eを示す。

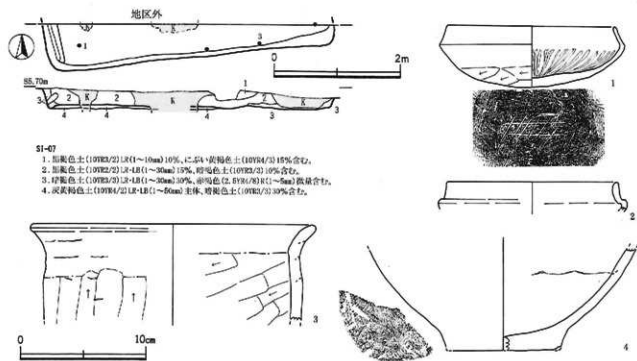
壁は現存高16～40cmで、やや外傾する。壁下には幅10～15cm、深さ5～8cmの壁溝が設けられ、遺存部は全体に認められた。また、東・西の壁際から内側に向かって各2条の間仕切溝が設けられていた。溝は幅16～20cm、深さ8cm程で、D1、D3、D4主柱穴に接するよう設けられているが、D2は主柱穴P2より約40cm南に設けられていた。これは、北東隅に貯蔵穴があり、一定の空間を確保する為と推察される。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を主体の土で整地しており、平坦で堅く締っていた。

柱穴はP1～P4の4基確認し、いずれも主柱穴と考えられる。これらは径23～38cmで、P4の上面が丸味を帯びる他はいずれも方形、床面からの深さは30～37cm程であった。北東に所在するP5は82×60cmの長方形で深さ42cm、貯蔵穴と考えられるが、目立った遺物の出土は無い。

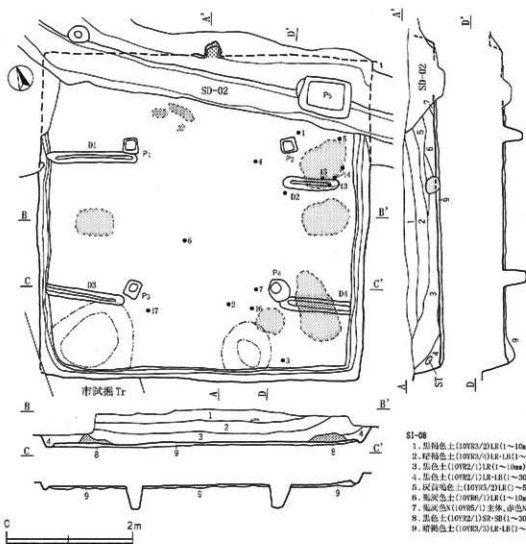
壁際の床面には所々に焼土を多く含む層が認められ、火災住居跡と考えられる。しかし、炭化材の遺存はほとんど認められなかった。また、床面には多数の土師器が遺存していたが、その多くは二次被熱により変色・変質していた。

カマドは北辺の中程に築かれていたがSD-02に切られていて、その痕跡を確認し得たに過ぎない。遺存し



SI-07

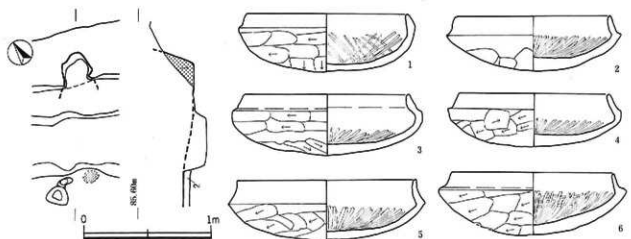
1. 黑褐色土(10YR3/2)LR(1~10mm)10%、L2M4-灰褐色土(10YR4/3)15%含む。
2. 黑褐色土(10YR2/2)LR-LR(1~30mm)15%、暗褐色土(10YR3/3)10%含む。
3. 暗褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~30mm)30%、暗褐色土(2.5YR3/6)R(1~5mm)微量含む。
4. 灰褐色土(10YR4/2)LR-LR(1~50mm)主体、暗褐色土(10YR3/3)30%含む。



SI-08

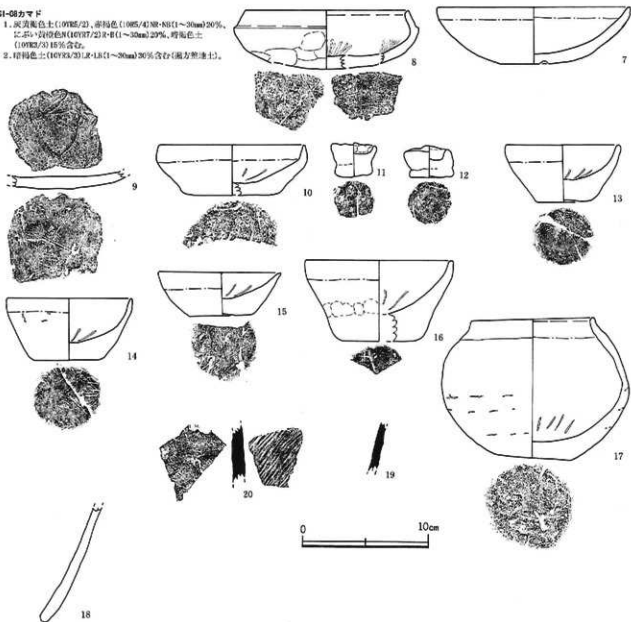
1. 黑褐色土(10YR3/2)LR(1~10mm)5%含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)LR-LR(1~40mm)30%含む。
3. 灰色土(10YR2/1)LR(1~10mm)5%含む。
4. 灰色土(10YR2/1)LR-LR(1~30mm)5%含む。
5. 灰褐色土(10YR3/2)LR(1~5mm)5%含む。
6. 灰褐色土(10YR3/1)LR(1~10mm)10%含む。
7. 灰褐色土(10YR3/1)主体、赤色土(10R1/6)40%含む。
8. 黒色土(10YR2/1)SR-SB(1~30mm)25%、L2(1~10mm)10%含む。
9. 暗褐色土(10YR3/3)LR-LR(1~30mm)30%含む(地方産地材)。

第 16 図 SI-07・出土遺物, SI-08



SI-08カマド

1. 灰褐色土(109R/2), 赤褐色(1085/4)NR-NB(1~30mm)20%
 に赤・黄褐色M(109R/2)R-B(1~30mm)23%, 埋色土
 (109R/2)15%含む。
 2. 埋色土(109R/2)R-LB(1~30mm)20%含む(黒方無漆土)。



第17図 SI-08 カマド・出土遺物

たのは、幅 25 cm、奥行き 23 cm の半円形、煙道の掘方の一部と推定される。

埋積土は 8 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。なお、ある程度の埋没が進んだ段階に南東より多数の礫が投棄されていたが、礫に混じってほぼ完形の土師器坏（7）、鉢（17）が出土した。

出土遺物（第 17 図、第 8 表、図版 19）

遺物は大部分が土師器で、埋積土中より須恵器坏（19）・甕（20）の細片が出土している。土師器は坏（1～9）、手づくね土器（10～16）、鉢（17）、甗（18）などがある。坏の底部外面に「記号」らしき沈線が印されたもの（8・9）が見られ、手づくね土器には径 3.5 cm と極小のもの（11・12）が混じる。（水野）

SI-09

遺構（第 18 図、図版 10H～11C）

調査区の北西端、4AGr に位置する。南東部は SI-08 との重複で、北東部は SD-02、北西部は攪乱によって切られていて遺存状態が不良である。北約 0.5 m に SI-06、南約 8 m に SI-11、東約 9 m に SI-05 が隣接する。

平面形・規模は前記の状況から明確にしないが、遺存部分から、南北長 2.5 m、東西長 2.3 m 程の方形と推定される。また、カマドの痕跡と見られるものを東辺北寄りに確認したが、後世の溝 SD-02 との重複で遺存状態が悪く、詳細は判然としない。西辺より推定した主軸方位は $N-1^{\circ}-E$ を示す。

壁は重複や試掘溝の関係で確認出来なかった。壁下に設けられた壁溝は西辺と南辺の西端に認められ、現存幅 15 cm、同深さ 5 cm 程であった。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊主体の土で整地されていたが、遺存状態が悪く、硬化面は判然としなかった。柱穴、貯蔵穴などは認められなかった。

カマドは、前述の如く SD-02 の重複により判然としないが、竪穴の北東隅に東西長 90 cm、南北長 80 cm の円形にカマドの崩壊土と思われるものが認められた為切解し追求した。しかし、後世の破壊が著しく位置の推定に留まる。

埋積土は 2 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物は西寄りの床面より土師器甕の底部片（1）が出土した他は SI-08 との重複部分の埋積土より出土の土師器、須恵器の小片類で図示し得たものは僅かである。

遺物（第 18 図、第 9 表、図版 20）

図示し得たものは床面出土の土師器甕の底部片（1）、埋積土中より出土の須恵器高台坏（2）、土師器小型甕（3）である。（水野）

SI-10

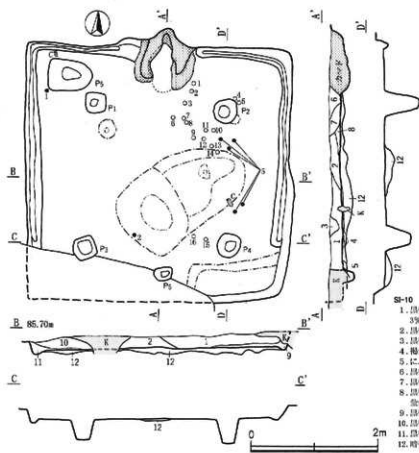
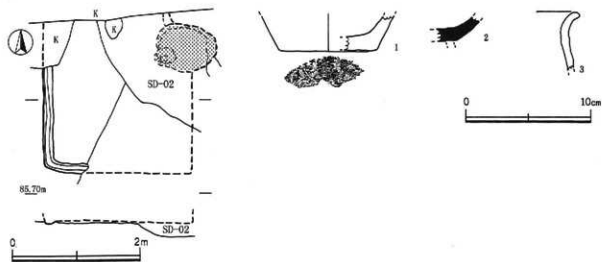
遺構（第 18・19 図、図版 11D～12D）

調査区の南西端、1A・B、2A・BGr に跨って所在し、南西部は攪乱によって切られていた。東約 2.5 m に SI-02、北約 5 m に SI-11 が隣接する。重複関係は無い。

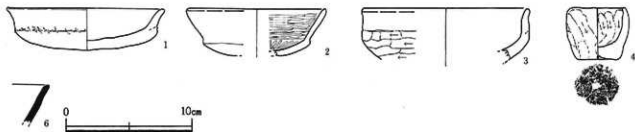
平面形・規模は、東西長 4.3 m、南北長 4 m の方形。北辺の中央にカマドが築かれ主軸方位は $N-2^{\circ}-W$ を示す。

壁は現存高 16～20 cm でやや外傾する。壁下には幅 10～18 cm、深さ 6～10 cm の壁溝が設けられていたが、東・西ともに南壁の手前 0.7 m 付近で止まり、南壁下には認められなかった。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊主体の土で整地し、ほぼ平坦で堅く締っていた。



- SI-10
1. 黒褐色土(10YR3/1)LR(1~10cm)19%,SR(1~10cm)8%,NR(1~10cm)3%含む。
 2. 黒褐色土(10YR3/1)LR(1~10cm)20%,SR(1~10cm)3%含む。
 3. 黒褐色土(10YR3/2)LR(1~3cm)10%,NR-NB(1~20cm)25%含む。
 4. 褐色土(10YR4/3)LR-LR(1~30cm)主体、黒褐色土(10YR3/2)30%含む。
 5. にぶ・黄褐色土(10YR4/3)LR(1~5cm)30%含む。
 6. 黒褐色土(10YR3/2)LR(1~10cm)15%,NR(1~10cm)13%含む。
 7. 黒褐色土(10YR3/2)LR(1~10cm)3%,NR-NB(1~20cm)30%含む。
 8. 黒褐色土(10YR3/2)LR(1~5cm)3%,NR(1~10cm)4%,SR(1~3cm)微量含む。
 9. 黒褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~25cm)20%,SR(1~3cm)微量含む。
 10. 黒褐色土(10YR3/2)LR(1~5cm)5%含む。
 11. 黒褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~50cm)40%,SR(1~5cm)微量含む。
 12. 明褐色土(10YR3/3)とLR-LR(1~60cm)の割合土(層方不明)。



第18図 SI-09・出土遺物,SI-10・出土遺物(1)

柱穴はP1～P4が主柱穴、貯蔵穴はP5、出入口施設がP6、P1脇のP7は性格不明である。主柱穴は径30～40cm、深さ32～55cm、P1・P3は方形、P2・P4は円形である。貯蔵穴は北西隅に設けられ、70×30～40cmの不整楕円形、深さ28cmで目立った遺物の出土は無い。P6は20×28cmの長方形、深さ18cm。

カマドは北辺のほぼ中央に、壁を幅80cm、奥行き30cmの三角形に掘り込み、灰白色粘土で築かれていた。カマドは内法が35cm、長さ1m程で、煙道のみが壁の外に設けられていた。住居の廃絶の際に破壊された為か支脚は遺存しなかった。

埋積土は10層に分けられるが、第3・6・7層は本跡埋没後の掘り込みと判断され、人為的埋没と考えられる。

遺物は貯蔵穴脇よりほぼ完形の土師器坏(1)が出土した他は土師器の破片類が少量で、カマド前の床面より網物鍬石が16点程出土した点が注目される。また、本跡では焼土は認められなかったが、貯蔵穴の北西脇とP4の北側より径8cm、長さ10～20cm程の炭化材が出土している。

遺物(第18・19図、第10・15表、図版20)

すべて土師器で、坏(1～3)、手づくね土器(4)、甕を図示した。礫利用の網物鍬石は幅5.34～7.15cm、厚さ2.91～5.42cm、長さ9.71～16.3cm、平均重量は529gであった。(柏崎)

SI-11

遺構(第19・20図、図版12E～13H)

調査区の西端中程、2A・B、3A・BGrに跨って所在する。南約5mにSI-10、北約2.5mにSI-08が隣接し、重複関係はなかった。

平面形・規模は、東西長4.9m、南北長3.8～4.2mの東西にやや長い長方形で、北西隅は丸味を帯びる。北辺の中央にカマドが設けられ、主軸方位はN-2°30'-Eを示す。

壁は現存高20～45cmで、やや外傾する。壁下には幅12～20cm、深さ5～10cmの壁溝が設けられておりカマド部分を除き囲繞する。

床面は粗掘りの後、ローム粒・塊を多く含む土で整地され、ほぼ平坦で堅く締っていた。なお、本跡の床面は改修が行われていて、古い床面より5～6cm程嵩上げされていた。

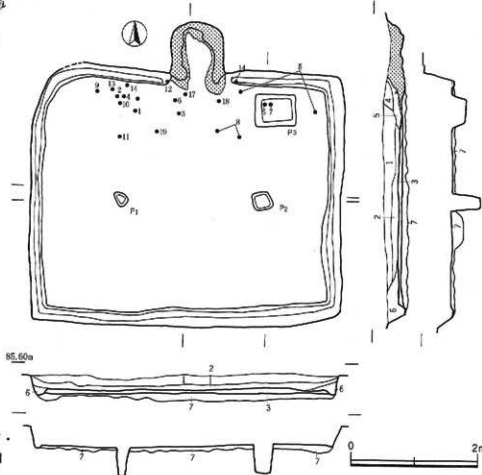
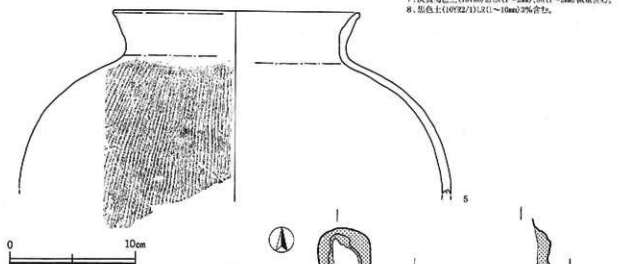
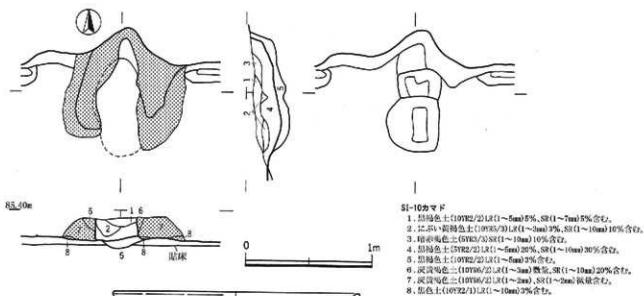
柱穴はP1・P2が主柱の2本柱で、北東隅のP3は貯蔵穴と考えられる。P1は25×18cmの不整楕円形、P2は30×28cmの方形で深さ45cm。新しい床面では明瞭でなかったが、古い床面では明瞭であった。貯蔵穴のP3は65×50cmの長方形で、深さ30cm、底面よりほぼ完形の土師器坏(5・7)が出土している。新床面上からも明瞭に確認し得た。

カマドは北壁の中央部を幅1m、奥行き0.8mの逆U字形に掘り込み、灰白色粘土で築かれていた。長さ約1m、内法40cm程で大部分が壁外に所在すると推定される。両袖の先端部に土師器甕が潰れた状態で遺存し、袖部先端の構築材と思われたが、検討を要する。また、カマド内に支脚と見られる長さ15cm程の細長い礫が遺存したが、原位置を離れており、住居の廃絶に際して焚口部とともに破壊されたものと思われる。

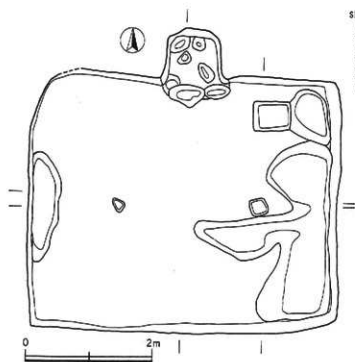
埋積土は6層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

本跡ではカマド周辺の床面よりほぼ完形の土師器が多数出土した。本跡は火災住居を想定し得る炭化物や焼土の遺存は認められなかったものの、出土した土器の多くは二次被熱によって変色、変質したと思われるものが多い。

遺物(第20～22図、第11表、図版20・21)

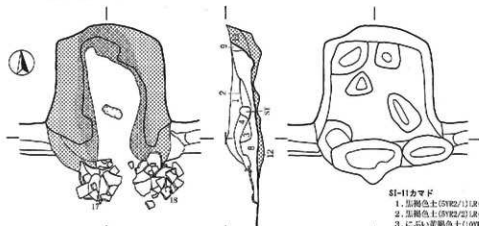


第19図 SI-10 カマド・
出土遺物(2), SI-11



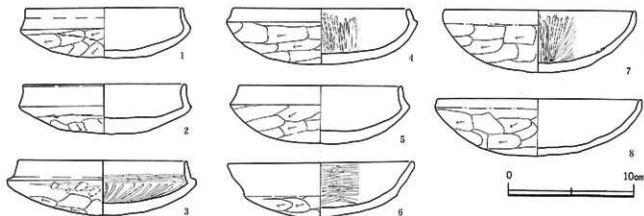
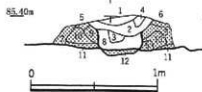
SI-11

1. 赤褐色土(10YR3/2)LR(1~10mm)10%、赤色(10R4/0)R(1~2mm)微量含む。
2. 赤褐色土(10YR3/1)LR(1~10mm)8%含む。
3. 赤褐色土(10YR3/2)LR-LR(1~40mm)30%含む(法楽焼土)。
4. 赤褐色土(10YR2/2)SR(1~10mm)3%、LR(1~3mm)微量、80~90(1~30mm)15%含む。
5. 灰褐色土(10YR4/2)赤褐色土(10YR2/2)40%、SR(1~3mm)微量含む。
6. 赤褐色土(10YR3/1)LR-LR(1~30mm)20%含む。
7. 赤褐色土(10YR2/2)LR-LR(1~60mm)30%含む(磁方焼土)。

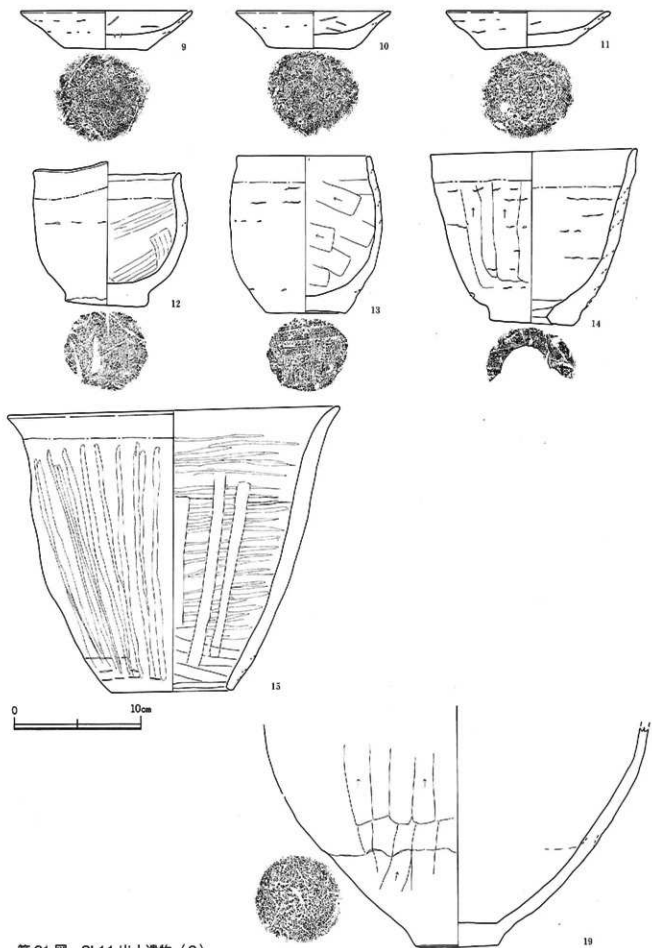


SI-11カマド

1. 赤褐色土(10YR2/1)LR(1~3mm)5%、SR(1~10mm)8%含む。
2. 赤褐色土(10YR2/2)LR(1~3mm)3%、SR(1~10mm)8%含む。
3. にじみ・灰褐色土(10YR5/3)SR(1~5mm)5%含む。
4. にじみ・灰褐色土(10YR5/3)と赤褐色土(10YR2/2)の混合土、SR(1~10mm)10%含む。
5. にじみ・灰褐色土(10YR5/3)と赤褐色土(10YR2/2)の混合土、SR(1~10mm)10%含む。
6. 赤褐色土(10YR2/2)LR(1~5mm)、SR(1~3mm)各1%含む。
7. 赤褐色土(10YR2/2)LR(1~10mm)15%含む。
8. 灰褐色土(10YR2/2)SR(80(1~30mm)20%含む。
9. 赤褐色土に、2YR5/8(赤土(10YR2/1)3%含む。
10. にじみ・赤褐色土(10YR5/2)LR(1~3mm)微量含む。
11. 赤土(10YR2/1)LR(1~7mm)10%含む。
12. 灰褐色土(10YR4/2)LR(1~5mm)15%、SR-SR(1~30mm)10%含む。
13. 赤褐色土(10YR3/2)SR(1~10mm)15%含む。



第20図 SI-11掘方・カマド・出土遺物(1)



第21図 SI-11 出土遺物(2)

遺物はすべて土師器で、杯（1～8）、皿（9～11）、小型甕（12・13）、小型甌（14）、甌（15）、甕（17～19）などがある。杯類はウルシ処理を施したものが多く、器面が荒れ、ウルシ処理の消失したものが多く。また、未整形に近い皿（9～11）はいずれも赤化し、ひび割れしており、二次被熱を受けたと考えられる。さらに、小型甕（12・13）、小型甌（14）、甕（16）なども外面未整形に近いものであった。（柏崎）

SI-12

遺構（第22図、図版8G～9D）

調査区の北西端、4BGrに所在し、西は攪乱に切られ、北は地区外に延びる。また、SI-06と重複しこれを切る。東約6mにSI-07、南約2.5mにSI-09が隣接する。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難い。現存の南北長は2m、同東西長は1.3m以上。東辺より推定される主軸方位はN-20°-Eを示す。

壁は現存高18～30cm、やや外傾する。壁下に壁溝は認められなかった。

床面は粗掘り後、ローム粒・塊を多く含む土で整地されていたが遺存状態が悪い。南東隅の床面下に径1m程の円形で深さ約20cmの掘り込みが認められたが、これは堅穴の粗掘りの一部と考えられる。

小穴は2基確認し、P1は一辺30cmの方形、深さ45cm（推定）で、南東隅の主柱穴と考えられる。P2は12×18cmの楕円形、深さ28cmで東壁に接して認められたが性格は不明。

カマドは調査区内では確認出来なかった。

遺物は埋積土中より土師器小片が4点程出土した。

遺物（第22図、第12表）

土師器杯・甕の破片が出土したものの、図示し得たのは杯1点（1）である。

（水野）

（2）土坑

今次調査区内では3基の土坑を確認した。いずれも遺物の出土はなかったが、埋積土の状態からSK-01は縄文時代、SD-02・03は古代以降の所産と推察される。

SK-01

遺構（第22図、図版14A・B）

調査区の東端部中程、2CGrに所在する。重複関係はなく、付近に該期の遺構も認められなかった。

平面形・規模は、ほぼ径86×72cmの楕円形で深さ20cm、底面は径50×46cmのほぼ円形であった。壁はやや外傾し、断面は鍋底状である。

埋積土は3層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土はなかった。

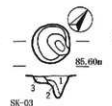
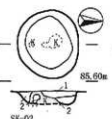
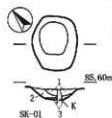
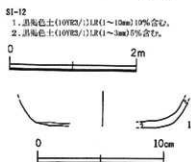
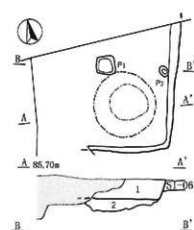
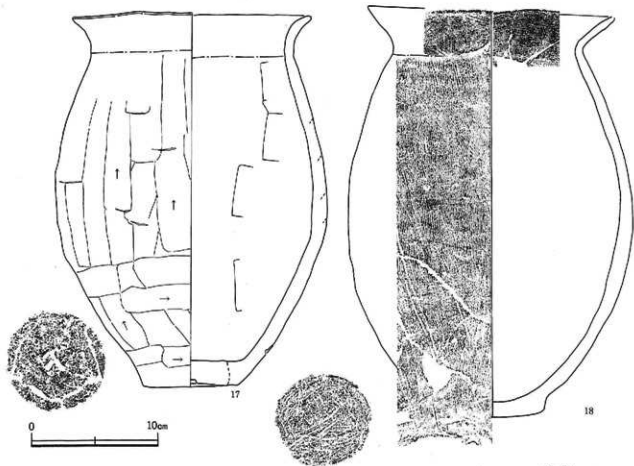
SK-02

遺構（第22図、図版15C・D）

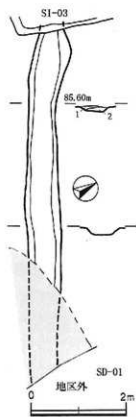
調査区の中央やや南寄り、2BGrに位置する。重複関係はないが樹木の根による攪乱が見られた。

平面形・規模は径108×97cmの円形、深さ22cm、底面も径76×68cmのほぼ円形であった。壁はやや外傾し、断面は鍋底状である。

埋積土は2層に分けられ、自然埋没と考えられる。



- SK-01
 1. 黑褐色土(10YR2/2)LR(1~3mm), 赤褐色
 土, 5YR4/6R(1~2mm) 磁片含む。
 2. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 熟灰, 6R(1
 ~2mm) 粗磁片含む。
 3. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 5% 含む, 1
 ~2層9割以上。
- SK-02
 1. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 5% 含む。
 2. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 含む,
 1~2層9割以上。
- SK-03
 1. 黒褐色土(10YR2/2)LR(1~3mm) 5%, 赤褐色
 土, 5YR4/6R(1~2mm) 磁片含む。
 2. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 10% 含む。
 3. 暗褐色土(10YR3/2)LR(1~3mm) 6%, 赤褐色
 土, 5YR4/6R(1~2mm) 含む。
 2~3層9割以上。



第22図 SI-11 出土遺物(3), SI-12・出土遺物, SK-01~03, SD-01

遺物の出土はなかった。

SK-03

遺構（第22図、図版14E・F）

調査区の中央やや西寄り、2BGrに位置する。東側にP32が重複し、これに切られていた。

平面形・規模は、径62×60cmの円形、深さ12cm、底面も52×45cmのほぼ円形。

埋積土は1層で、自然埋没と考えられる。

遺物の出土はなかった。

（水野）

（3）溝跡

調査区内において東西に延びる溝跡を2条確認したが、南側のSD-01は古代の所産と見られるが、中央部から北西に延びるSD-02は埋積土の状態から近世以降の耕作地に関連する地境もしくは根切溝と判断される為、調査対象から除外した。

SD-01

遺構（第22図、図版14G・H）

調査区の南東隅、1CGrに所在し、南東隅は攪乱によって切られていたが、本来は調査区外に延びると推察される。北西はSI-03と接し不明となり、SI-03のセクションペルトでは確認出来なかったが、本跡が先行すると断定するには躊躇する。

上幅60～80cm、深さ12～16cm、底幅35～45cmの断面鍋底状。調査区内で長さ5.1m確認し、中軸方位はN-50° 30' -Wを示す。

埋積土は2層に分けられ、上層は自然埋没と考えられるが、下層は人為的な可能性が高い。

埋積土中より土師器小片が3片程出土したが図示し得るものはなかった。

（水野）

（4）小穴（第13表、図版15B～D）

調査区内全域より小穴を30余基確認した。これらは、2A～C、3AGrに集中する傾向が見られた。径15×14cmのP30が最小、径45×67cmのP14を最大とし、径30～40cmの円形を主体とするも、楕円形・方形のものも一定数認められた。深さは約6cmのP10が最も浅く、51cmのP16が最も深い。また、建物等の構造物として捉えられたものはなく、遺物が出土したのはP21のみである。埋積土の状況から古代の所産と推定されるに留まる。

（水野）

第1表 SI-01 出土土物観察表 透视图に示す出土位置は挿入No.と合致する

() 推定値 [] 現存値

No.	種別		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo.・備考
	器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径				
1-1	土師器 杯	口径 (11.6) 器高 3.2 底径 —	40%	口辺部外面、内面横ナゲ後ミガキ、ウルシ処理、体・底部外面へラ削り後ミガキ	胎土 組成 色調	No.1 二次被熱で器面荒れる
1-2	土師器 杯	口径 (12.8) 器高 [3.0] 底径 —	20%	口辺部外面、内面横ナゲ後ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	埋蔵土1区 二次被熱で器面荒れる
1-3	土師器 杯	口径 (12.0) 器高 — 底径 —	15%	口辺部外面、内面横ナゲ後ウルシ処理	胎土 組成 色調	埋蔵土1区
1-4	土師器 手づくね土器	口径 (13.4) 器高 (5.0) 底径 (8.0)	30%	手づくね、口辺部外面、内面横ナゲ、体部外面削りミガキ、体部外面に接合痕目立つ	胎土 組成 色調	埋蔵土2区
1-5	土師器 手づくね土器	口径 — 器高 [4.1] 底径 4.5	40%	手づくね、内外面ナゲ、体部外面に接合痕、底部外面に梯状の圧痕	胎土 組成 色調	埋蔵土2区

第2表 SI-02 出土土物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo.・備考
	器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径				
2-1	土師器 杯	口径 (9.2) 器高 [3.3] 底径 —	15%	口辺部外面、内面横ナゲ後ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	No.3 二次被熱でややもろい
2-2	土師器 杯 or 皿	口径 (15.2) 器高 [2.5] 底径 —	8%	口辺部外面、内面横ナゲ、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	埋蔵土2区
2-3	土師器 杯	口径 (13.5) 器高 [5.5] 底径 —	25%	口辺部外面、内面横ナゲ、体・底部外面へラ削り後ミガキ、内面の口辺にウルシ処理のこぼ	胎土 組成 色調	埋蔵土4区 二次被熱で器面荒れる
2-4	土師器 杯	口径 (11.0) 器高 [2.7] 底径 —	20%	口辺部外面、内面横ナゲ、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	No.3 二次被熱で器面荒れる
2-5	土師器 杯 or 皿	口径 (19.5) 器高 [4.9] 底径 —	30%	口辺部外面、内面横ナゲ後ミガキ、体・底部外面へラ削り後削りミガキ	胎土 組成 色調	カマドNo.2
2-6	土師器 小壺 or 鉢	口径 (13.6) 器高 — 底径 —	10%	口辺部外面、内面横ナゲ、体部外面尖形	胎土 組成 色調	埋蔵土3区 二次被熱で器面荒れる
2-7	土師器 小壺	口径 (17.3) 器高 [12.1] 底径 —	25%	口辺部内外面横ナゲ、体部外面削り不明	胎土 組成 色調	No.1 二次被熱で器面荒れ、もろい
2-8	土師器 壺	口径 (21.8) 器高 — 底径 —	10%	口辺部内外面横ナゲ、体部外面削り、外口縁土線接合痕	胎土 組成 色調	埋蔵土4区
2-9	土師器 壺	口径 — 器高 — 底径 7.0	10%	内面ナゲ、底部外面へラ削り、体部外面下端削り	胎土 組成 色調	埋蔵土1区
2-10	土師器 壺	口径 — 器高 [8.2] 底径 (8.4)	30%	内面横ナゲナゲ、体部外面へラ削り後ナゲ、底部外面へラ削り、内面接合痕	胎土 組成 色調	No.2、埋蔵土3・4区
2-11	須恵器 壺	口径 — 器高 — 底径 —	5%	ロコロ製形、口辺部外面に1条の縦線、その下に7条1年のラン線状文	胎土 組成 色調	埋蔵土3・4区 二次被熱で器面荒れる

第3表 SI-03 出土土物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo.・備考
	器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径				
3-1	土師器 杯	口径 14.5 器高 4.5 底径 7.4	80%	口辺部内外面横ナゲ、内面ナゲ後削りミガキ、ウルシ処理、体・底部外面へラ削り、体部外面端土線接合痕目立つ	胎土 組成 色調	No.18 二次被熱でウルシ消失か
3-2	土師器 杯	口径 (13.2) 器高 4.5 底径 —	70%	口辺部内外面横ナゲ、内面ナゲ、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	No.8
3-3	土師器 杯	口径 12.7 器高 5.3 底径 6.7	100%	口辺部内外面横ナゲ、内面ナゲ後削りミガキ、体部外面削り形に近い、底部外ナゲ	胎土 組成 色調	No.20
3-4	土師器 杯	口径 12.0 器高 4.5 底径 —	60%	内面、口辺部外面横ナゲ、内面ミガキ後ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 組成 色調	No.6 二次被熱でウルシ消失か
3-5	土師器 杯	口径 11.9 器高 6.0 底径 6.2	95%	内面、口辺部外面横ナゲ、体・底部外面削り	胎土 組成 色調	No.13・20 二次被熱で器面荒れ、ひび割れ

第3表 SI-03 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口径	口径・器高・底径				
3-6	土師器 杯	口径	11.7	98%	口辺部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、体部外面未整形、底部外面直削り	胎土 焼成 色調	粗砂粒混、赤褐色粒目立つ 良好 (内外) 棕色
		器高	6.8				
3-7	土師器 杯	口径	9.8	100%	口辺部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、体部外面未整形、底部外面の内周へラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混、白色砂粒目立つ 良好 (内外) 棕色
		器高	6.7				
3-8	土師器 手づくね土器	口径	8.4	60%	内面、口辺部外面横ナデ、体・底部外面未整形、体部外面に布土粒接合痕目立つ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内外) 棕色
		器高	5.4				
3-9	土師器 手づくね土器	口径	(10.0)	40%	口辺部内面横ナデ、内面ナデ、底部外部粗削りナデ、底部外面不明、内面黒色処理?	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 黒色 (外) 褐色
		器高	5.7				
3-10	土師器 小型瓶	口径	14.6	100%	内面、口辺部外面横ナデ、体部外面削りナデ、底部に径18mmの円孔を穿つ、内面底部と体部の接合部目立つ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内外) 黄褐色
		器高	10.3				
3-11	土師器 鉢	口径	10.4	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ヘラナゲ、体部外面部部削れ不詳、底部同形状	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 灰褐色 (外) にぶい赤褐色
		器高	11.9				
3-12	土師器 小型甕	口径	(16.5)	50%	口辺部内外面横ナデ、体部内面横ヘラナゲ、体部外面上位ナゲ、下位斜めヘラナゲ、底部外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調	粗砂粒多、φ9mmの小石含む 良好 (内) にぶい黄褐色 (外) 黒色、にぶい黄褐色
		器高	16.2				
3-13	土師器 甕	口径	13.2	80%	口辺部内外面横ナデ、内面横ヘラナゲ、体部外面横ヘラナゲ、底部外面不詳	胎土 焼成 色調	粗砂粒多 良好 (内外) 黒褐色、にぶい黄褐色
		器高	20.0				
3-14	土師器 甕	口径	(15.6)	80%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面横ヘラナゲ、体部外面横ヘラナゲ、底部外面ヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒多 良好 (内) 黄褐色 (外) 灰黄褐色
		器高	31.6				
3-15	土師器 甕	口径	25.5	90%	口辺部内外面横ナデ、体部外面横ヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) にぶい黄褐色 (外) 黒色、赤褐色、灰黄色
		器高	24.7				
3-16	土師器 甕	口径	25.6	70%	口辺部外面横ナデ、内面の上位横、中・下位縦ミガキ、体部外面横ヘラナゲ後削り・縦ミガキ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内外) 黄褐色、棕色
		器高	26.6				
	器種	口径	9.9				

第4表 SI-04 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口径	口径・器高・底径				
4-1	土師器 杯	口径	—	28%	内面ミガキ後黒色処理、外面ヘラ削り、中央に穴開きのこす	胎土 焼成 色調	粗砂粒混、白色砂粒目立つ 良好 (内) 黒色 (外) 棕色
		器高	—				
4-2	土師器 小型甕	口径	—	8%	口辺部内外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内外) にぶい黄褐色、黒褐色
		器高	—				
4-3	土師器 甕	口径	(15.0)	10%	口辺部内外面横ナデ、体部内面横ヘラナゲ、外面横ヘラ削り後ナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) にぶい黄褐色、粗灰色 (外) 棕色
		器高	—				

第5表 SI-05 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口径	口径・器高・底径				
5-1	土師器 杯	口径	10.7	60%	口辺部内外面横ナデ、内面粗削りミガキ後ウレシ処理、体・底部外面ヘラ削り後粗削りヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内外) 明赤褐色
		器高	5.3				
5-2	土師器 杯	口径	12.0	70%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面粗削りミガキ後ウレシ処理、内外面ヘラ削り後ヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 褐色、暗褐色 (外) にぶい黄褐色
		器高	5.2				
5-3	土師器 杯	口径	12.1	85%	口辺部内外面横ナデ、内面ミガキ後ウレシ処理、体・底部外面ヘラ削り後ヘラナゲ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 黒色 (外) 黄褐色、黒色
		器高	5.9				
5-4	土師器 杯	口径	12.0	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面粗削りミガキ、内外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 灰黄色 (外) にぶい黄褐色
		器高	5.8				
5-5	土師器 杯	口径	11.9	95%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウレシ処理、内外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良好 (内) 暗褐色 (外) 棕色
		器高	5.1				

第5表 SI-05 出土土物観察表

()推定値 []現存状況

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
5-6	土師器 杯	口径 13.2 器高 4.4 底径 —	100%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ、筒外面へラ削り	胎土 砂粒多量混入、φ9mmの小石含む 焼成 良好 色調 (内外) ぶい黄褐色、外面一部赤褐色	No.8
5-7	土師器 杯	口径 13.3 器高 5.2 底径 —	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウルシ処理、筒外面へラ削り	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) 暗褐色 (外) 褐色	埋藏土3区
5-8	土師器 杯	口径 13.1 器高 5.1 底径 —	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウルシ処理、筒外面へラ削り	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) 暗褐色 (外) 暗褐色	No.7 内面の器面荒れ、ウルシ印あり
5-9	土師器 杯	口径 14.6 器高 5.2 底径 —	70%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウルシ処理、筒外面へラ削り	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) 黒褐色 (外) 褐色、黄褐色	No.11
5-10	土師器 杯	口径 13.0 器高 4.3 底径 —	85%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウルシ処理、筒外面へラ削り後ヘラナデ	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) 黒色 (外) 暗褐色	No.17
5-11	土師器 手づくね土器	口径 6.8 器高 5.2 底径 4.7	95%	手づくね、内面滑ナデ、体・底部外面粗ワザ、底部外面藻状の圧痕	胎土 粗良、赤褐色粒目立つ 焼成 良好 色調 (内外) 褐色、黄褐色、灰黄褐色	P5-3 二次被熱によりひび割れる
5-12	土師器 甕	口径 21.4 器高 [22.9] 底径 —	90%	口辺部内外面横ナデ、体部内面縦ヘラナデ後ミガキ、体部外面縦ヘラナデ	胎土 砂粒混、赤褐色粒目立つ 焼成 良好 色調 (内外) 黄褐色、外面一部褐色	P5-1・2・4 二次被熱により破損
5-13	土師器 甕	口径 29.4 器高 27.3 底径 6.2	90%	口辺部内外面横ナデ、内面口辺部縦、体部縦ミガキ、体部外面縦ヘラナデ	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内外) 褐色、外面一部黒色	P5-1, No.10 二次被熱により内面の器面荒れる
5-14	土師器 甕	口径 15.8 器高 21.4 底径 5.8	70%	口辺部内外面横ナデ、体部内面縦ヘラナデ、体部外面縦ヘラナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒多量 焼成 不良 色調 (内外) 赤褐色、一部黒褐色	カマドNo.1 二次被熱でもろい
5-15	鉄器 手鎌 (穂摘具)	長さ 5.8 幅 1.5 厚さ 0.2 重さ 4.2	100%	刃端に径3.5mmの小孔をもつ	胎土 — 焼成 — 色調 —	表面に炭状の痕跡

第6表 SI-06 出土土物観察表

()推定値 []現存状況

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
6-1	土師器 杯	口径 14.2 器高 4.2 底径 —	95%	口辺部外面、内面横ナデ後内面ミガキ、ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) ぶい黄褐色 (外) 黒色	No.1 二次被熱でウルシ処理消失
6-2	土師器 杯	口径 — 器高 — 底径 —	30%	口辺部外面、内面横ナデ後内面ミガキ、ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 砂粒混、赤褐色粒目立つ 焼成 良好 色調 (内) 褐色 (外) ぶい褐色	埋藏土4区 二次被熱でウルシ処理消失
6-3	土師器 杯	口径 — 器高 — 底径 —	15%	口辺部外面、内面横ナデ、体部外面へラ削り	胎土 砂粒混、長石目立つ 焼成 良好 色調 (内外) ぶい黄褐色	No.3
6-4	土師器 小型甕	口径 — 器高 [16.1] 底径 —	30%	不明 口辺・体部片	胎土 細砂粒混 焼成 不良(二次的) 色調 (内) 黄褐色 (外) 黄褐色	No.2 二次被熱で器面の荒れ著しい
6-5	石製品 磁石	口径 22.1 幅 10.4 厚さ 3.0 重さ 1,142	95%	上・下両と側面、小口面の計4面を欠用	胎土 — 焼成 — 色調 —	被熱で表面一部剥離

第7表 SI-07 出土土物観察表

()推定値 []現存状況

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
7-1	土師器 杯	口径 13.4 器高 5.1 底径 —	95%	口辺部内外面横ナデ後内面放射状のミガキ、ウルシ処理、体・底部外面へラ削り	胎土 細砂粒混 焼成 良好 色調 (内外) 黒色、ぶい黄褐色	No.1 二次被熱で内面の器面荒れ、一部ウルシ処理消失、底部外面に記号状のキズミ
7-2	土師器 杯	口径 — 器高 — 底径 —	5%	口辺部内外面横ナデ後内面ミガキ	胎土 細砂粒混 焼成 良好 色調 (内外) 黒色	埋藏土
7-3	土師器 甕	口径 (22.6) 器高 — 底径 —	30%	口辺部内外面横ナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面縦ヘラ削り	胎土 砂粒混 焼成 良好 色調 (内) 黒褐色 (外) 褐色	No.3
7-4	土師器 甕	口径 — 器高 [8.0] 底径 (9.0)	20%	内面横ヘラナデ、体部外面へラ削り後ナデ、底部外面へラ削り、内面に縦合痕	胎土 粗砂粒混 焼成 良好 色調 (内) ぶい褐色 (外) 褐色	埋藏土

第8表 SI-08 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
8-1	土師器 鉢	口径 13.0 器高 4.6 底径 —	95%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面ミガキ後ウルクシ処理、内外面ヘラ削り後体部ヘラナデ	胎土 砂状黒、白色砂状目立つ 焼成 良好 色調 (内外) 赤褐色、一部黄褐色	No. 1 二次被熱により内面のウルクシ削欠、器面荒れる
8-2	土師器 杯	口径 12.8 器高 4.9 底径 —	95%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面椎いミガキ後ウルクシ処理、内外面ヘラ削り	胎土 砂状黒、白色砂状目立つ 焼成 良好 色調 (内外) 黒褐色、一部灰黄褐色	No. 13
8-3	土師器 杯	口径 (12.8) 器高 4.9 底径 —	50%	内面、口辺部外面横ナデ、体・底部内面椎いミガキ、ウルクシ処理、内外面ヘラ削り後体部ヘラナデ	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内外) 暗褐色、一部に灰黄褐色	No. 10
8-4	土師器 杯	口径 12.0 器高 4.4 底径 —	90%	内面、口辺部外面横ナデ後ミガキ、ウルクシ処理、体・底部外面ヘラ削り	胎土 砂状黒、φ7mm小石混 焼成 良好 色調 (内外) 黒褐色 (内) 赤褐色 (外) 暗赤褐色	No. 17 二次被熱により内底面のウルクシ削欠、器面荒れる
8-5	土師器 杯	口径 (13.8) 器高 4.5 底径 —	60%	内面、口辺部横ナデ後ミガキ、ウルクシ処理、体・底部ヘラ削り	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内外) 黒褐色 (外) 赤褐色	No. 2
8-6	土師器 鉢	口径 13.5 器高 8.0 底径 —	70%	口辺部内外面横ナデ、体・底部椎いミガキ後ウルクシ処理、内外面ヘラ削り	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内) 黒褐色 (外) 暗褐色	No. 14 二次被熱によるものか内面の器面荒れ、ウルクシ削欠
8-7	土師器 杯	口径 18.4 器高 4.6 底径 —	95%	内面、口辺部外面横ナデ後ウルクシ処理、体・底部外面ヘラ削り後ナデ	胎土 砂状黒、赤褐色目立つ 焼成 ややあまい(二次的?) 色調 (内外) 暗褐色、黄褐色	No. 22 (埋積土上層) 二次被熱でウルクシ削欠
8-8	土師器 杯	口径 (12.8) 器高 (4.6) 底径 —	40%	口辺〜底部	胎土 砂状黒 焼成 (内) 黒褐色 (外) 明赤褐色 色調 (内) 黒褐色 (外) 暗赤褐色	埋積土2区 二次被熱でウルクシ削欠、底部外面ヘラ削り「×」
8-9	土師器 杯	口径 — 器高 — 底径 —	25%	口辺〜底部	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内) 黒褐色 (外) 暗赤褐色	埋積土2区 底部外面ヘラ削り「※」
8-10	土師器 杯	口径 — 器高 4.0 底径 6.5	40%	口辺部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、体・底部外面椎いナデ、外底部環状に近い	胎土 粗砂状 焼成 良好 色調 (内外) 黒褐色、暗褐色	埋積土3区
8-11	土師器 手づくね土器・小	口径 3.4 器高 2.6 底径 3.1	95%	手づくね、内面横ナデ、外面体・底部荒いナデ、底部外面に環状の正痕	胎土 精良 焼成 良好 色調 (内外) 暗褐色、一部黒色	埋積土4区
8-12	土師器 手づくね土器・小	口径 3.4 器高 2.3 底径 3.4	95%	手づくね、内面横ナデ、外面体・底部荒いナデ、体部外面粘土接合痕	胎土 精良 焼成 良好 色調 (内外) 黒褐色	埋積土4区 内底面に径5〜8mmの溝状に付着物
8-13	土師器 手づくね土器	口径 8.9 器高 4.2 底径 4.2	90%	手づくね、口辺部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、外面椎いナデ	胎土 精良、赤褐色目立つ 焼成 ややあまい(二次的?) 色調 (内外) 暗褐色	No. 5・7 二次被熱によるものかひび割れる。
8-14	土師器 手づくね土器	口径 10.0 器高 4.9 底径 4.9	55%	手づくね、口辺部内外面横ナデ、内面ナデ、体部外面椎いナデで粘土接合痕目立つ、底部外面環状の正痕	胎土 精良 焼成 ややあまい(二次的?) 色調 (内外) 暗褐色	No. 3・5 二次被熱によるものかひび割れる。
8-15	土師器 手づくね土器	口径 9.4 器高 3.7 底径 4.8	50%	手づくね、口辺部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、外面椎いナデ、底部外面環状の正痕	胎土 精良、赤褐色目立つ 焼成 ややあまい(二次的?) 色調 (内外) 暗褐色	No. 6 二次被熱によるものかひび割れる。
8-16	土師器 手づくね土器	口径 — 器高 6.1 底径 —	30%	口辺〜底部	胎土 精良 焼成 ややあまい(二次的?) 色調 (内外) 黄褐色	No. 16 二次被熱によるものかひび割れる。
8-17	土師器 鉢	口径 10.0 器高 10.9 底径 5.8	100%	口辺部外面、内面横ナデ、内面底部ヘラナデ、外面体底部椎いナデ、体部外面粘土接合痕目立つ	胎土 砂状多量混 焼成 良好 色調 (内) 赤褐色、黄褐色 (外) 灰黄褐色、黒色	No. 21 (埋積土上層) 二次被熱によるものか器面荒れる。内面の所々に赤褐色の付着が見られる。
8-18	土師器 瓶	口径 — 器高 [0.0] 底径 —	—	体部断片	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内) 暗褐色、黄褐色 (外) 黄褐色、黒色	埋積土4区
8-19	須恵器 杯	口径 — 器高 — 底径 —	—	体部断片	胎土 砂状黒、長石粒含む 焼成 良好 色調 (内外) 灰白色	埋積土2区
8-20	須恵器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	—	体部断片	胎土 砂状黒 焼成 良好 色調 (内外) 灰白色	埋積土1区

第9表 SI-09 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口徑・器高	底径				
9-1	土師器 甕	口徑	—	5% 底部断片	内面ナデ、底部外面へラ削り、 体部外面削りナデ	胎土 粗砂多量混 焼成 良好 色調 (内)にぶい黄褐色(外)赤褐色	No.1
		器高	—				
		底径	(8.0)				
9-2	須恵器 高台杯	口徑	—	10% 底部断片	コクロ整形、付高台	胎土 砂較混、長石粒目立つ 焼成 良好 色調 (内外)灰色	埋積土 二次被熱
		器高	—				
		底径	—				
9-3	土師器 甕	口徑	—	5% 口辺・体部断片	口辺部内外面横ナデ、体部外面 へラ削り、内面にへラナデ	胎土 砂較多量混 焼成 良好 色調 (内外)褐色	埋積土
		器高	—				
		底径	—				

第10表 SI-10 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口徑・器高	底径				
10-1	土師器 杯	口徑	12.4	90%	口辺部外面、内面横ナデ、体、 底部外面未整形、粘土粘接合痕 目立つ	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)黒色、黄褐色	No.12 二次被熱で器面の荒れ著しい
		器高	3.3				
		底径	—				
10-2	土師器 杯	口徑	(13.1)	25%	口辺部外面、内面横ナデ後内面 ミガキ、体・底部外面へラ削り、 外面粘接合痕	胎土 砂較混、白色砂粒目立つ 焼成 良好 色調 (内)暗褐色(外)黒色	No.11
		器高	[4.1]				
		底径	—				
10-3	土師器 杯	口徑	(10.9)	8%	口辺部外、内面横ナデ、体・底 部外面へラ削り	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)黄褐色	埋積土3区 二次被熱で器面やや荒れる
		器高	[3.7]				
		底径	—				
10-4	土師器 手づくね土器	口徑	(4.8)	35%	手づくね、外面横ナデ、内面粗 い横ナデ、底部外面粘土接合痕	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)褐色、にぶい黄褐色	埋積土1区 二次被熱
		器高	4.1				
		底径	3.2				
10-5	土師器 甕	口徑	—	25%	口辺部内外面横ナデ、体部外面 クシ形、内面へラナデ	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)黄褐色	No.1~5
		器高	—				
		底径	—				
10-6	須恵器 杯	口徑	—	10%	コクロ整形	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)灰白色	埋積土
		器高	—				
		底径	—				

第11表 SI-11 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考
		口徑・器高	底径				
11-1	土師器 杯	口徑	12.3	100%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ、内外面へラ削り	胎土 砂較混 焼成 良好 色調 (内外)黄褐色、外面一部黒色、明 赤褐色	No.15 二次被熱によるものか、内 面の器面荒れ著しい
		器高	3.9				
		底径	—				
11-2	土師器 杯	口徑	12.8	100%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ、内外面へラ削り、体 部外面に粘土接合	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)にぶい黄褐色	No.20 二次被熱によるものか、器 面の荒れ著しい
		器高	3.9				
		底径	—				
11-3	土師器 杯	口徑	13.4	100%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ後ウレシ処理、内外 面へラ削り	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調	No.8 二次被熱によりウレシ消失か
		器高	4.5				
		底径	—				
11-4	土師器 杯	口徑	14.3	100%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ後ウレシ処理、内外 面へラ削り	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (外)にぶい黄褐色、黒褐色	No.21 二次被熱により器面の荒れ 著しく、ウレシ消失か
		器高	4.4				
		底径	—				
11-5	土師器 杯	口徑	13.1	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ後ウレシ処理、内外 面へラ削り	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)黒色、外面一部黄褐色	No.6 二次被熱によるものか内外 面とも器面の荒れ著しい、 ひび割れ
		器高	4.5				
		底径	—				
11-6	土師器 杯	口徑	14.7	95%	口辺部内外面横ナデ、内面ミガ キ後ウレシ処理、体・底部外面 へラ削り	胎土 粗砂混、長石、赤褐色粒目立つ 焼成 良好 色調 (内)黒色(外)にぶい黄褐色	No.9
		器高	4.4				
		底径	—				
11-7	土師器 杯	口徑	15.2	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部 内面ミガキ後ウレシ処理、内外 面へラ削り	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)暗褐色、一部赤色	No.6 二次被熱により内面の器面 荒れ著しい
		器高	4.8				
		底径	—				
11-8	土師器 杯(皿)	口徑	16.5	85%	内面、口辺部外面横ナデ後ウレ シ処理、体・底部外面へラ削り 後横ナデ	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)褐色、暗褐色、一部黒褐色	No.2・3・25 二次被熱により器面荒れ、 ウレシ一部消失
		器高	4.7				
		底径	—				
11-9	土師器 皿	口徑	13.3	95%	内面へラナデ後横ナデ、口辺 部内外面横ナデ、体・底部横 ナデ、未整形に近い、外面に粘 土粘接合痕	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)褐色、一部明赤褐色	No.23 二次被熱によりひび割れ
		器高	3.0				
		底径	6.5				
11-10	土師器 皿	口徑	12.0	95%	内面へラナデ後横ナデ、口辺 部内外面横ナデ、体・底部外面 横ナデ、未整形に近い	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内)明赤褐色(外)褐色、黒褐色	No.17 二次被熱によりひび割れ
		器高	3.0				
		底径	6.5				
11-11	土師器 皿	口徑	13.0	95%	内面へラナデ後横ナデ、口辺 部内外面横ナデ、体・底部外面 横ナデ、未整形に近い	胎土 粗砂混 焼成 良好 色調 (内外)明赤褐色、褐色	No.14 二次被熱によりひび割れ
		器高	3.1				
		底径	6.5				

第11表 S1-11 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存数

No	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手摺等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考	
		口徑	口徑・器高・底径					
11-12	土師器 小笠蓋	口徑	11.2	100%	口辺部内外面横ナデ、内面横ヘラナデ、体部外面横ヘラナデ、底面外面ナデ、底状正張目立つ、体部外面に粘土粒接合痕	粘土 焼成 色調	砂粒多、赤褐色粒目立つ 良好 (内外) 棕色、黄褐色、一部黒褐色	No.11 二次被熱か、黄色
		器高	11.0					
	土師器 小笠蓋	口徑	10.5	95%	口辺部内外面横ナデ、内面横ヘラナデ、体部外面横・斜めにヘラナデ、底部外面ヘラナデ、尖整形に近い、体部外面粘土粒接合痕多	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内) 赤色 (外) 棕色、黄褐色	No.22 二次被熱か、器面荒れる
		器高	12.5					
	土師器 小瓶	口徑	16.3	90%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面粗いミガキ、体部外面横ヘラナデ、粘土粒接合痕多、底部外面不整面、径3.7cmの円孔	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内外) 棕色、外面一部黒色、黄褐色	No.24 二次被熱か、黄色
		器高	13.5					
	土師器 瓶	口徑	25.8	80%	口辺部内外面横ナデ、内面上位横下位置ミガキ、体部外面横ヘラナデ	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内外) 赤褐色、一部暗灰色	No.7・4 二次被熱か、内面磨面荒れる
		器高	22.5					
	欠季	底径	9.3					
11-17	土師器 甕	口徑	18.8	80%	口辺部内外面横ナデ、体・底部内面横ヘラナデ、体部外面横・斜めにヘラナデ、底部外面ヘラナデ、中央凹	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内外) に多い黄褐色、一部黒褐色	カマドNo.1 体部外面にカマドの粘土焼付く、二次被熱で内面の荒れ目立つ
		器高	29.8					
		底径	7.4					
11-18	土師器 甕	口徑	21.0	80%	口辺部内外面横ナデ、体部内面ヘラナデ、体部外面横・斜めにヘラナデ、底部外面へつ削りか	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内) に多い黄褐色 (外) 灰褐色	カマドNo.2 二次被熱で内面の器面荒れ著しい
		器高	32.6					
		底径	8.2					
11-19	土師器 甕	口徑	—	50%	内面の整形不部、外面ヘラナデ、埋ワナデ	粘土 焼成 色調	砂粒多 良好 (内外) に多い黄褐色、暗褐色	No.12 二次被熱により器面荒れ、内面著しい
		器高	[16.5]					
		底径	6.8					

第12表 S1-12 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存数

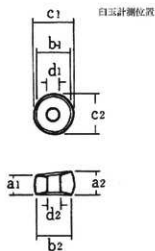
No	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手摺等	胎土、焼成、色調	取上げNo・備考	
		口徑	口徑・器高・底径					
12-1	土師器 杯	口徑	—	15%	内面横ナデ、体部外面横ヘラナデ、底部外面ヘラナデ、全体ウレシ形起しか	粘土 焼成 色調	細砂粒多 良好 (内外) に多い黄褐色	埋積土
		器高	—					
		底径	(11.0)					

第13表 小穴計測表

P	Gr	東西	南北	深さ	平面形	備考	P	Gr	東西	南北	深さ	平面形	備考
2	1-2C	29	30	15	円形		20	2A	28	22	13	円形	
3	2C	32	33	38	円形		21A	3A	24	18	30	方形	土師器片出土 Bを切る
4	2C	26	26	28	円形		21B	3A	23	18	28	方形	土師器片出土 Aに切られる
5	2C	33	32	16	円形								
6	2C	33	32	17	円形		22	3A	26	24	16	方形	
7	2C	30	28	23	円形		23	3A	25	18	10	楕円形	
8	2C	32	25	24	方形		24	2A	26	48	20	楕円形	
9	2C	29	32	22	方形		25	2B	33	40	30	楕円形	
10	2C	33	28	6	円形		26	2B	52	34	52	楕円形	斜めに掘る
11	2C	34	35	26	円形		27	2B	64	45	41	楕円形	斜めに掘る
12	2C	50	47	26	円形		28	欠					
13	欠						29	2B	27	24	26	円形	
14	2C	45	67	21	楕円形		30	2B	15	14	16	円形	
15	2C	26	33	30	楕円形		31	2A	46	53	25	楕円形	
16	2A	37	31	51	円形	斜めに掘る	32	2B	42	28	37	楕円形	SK-03を切る
17	2A	19	18	8	円形								
18	2A	(28)	20	23	円形								

第14表 白玉計測表

No.	計測値(mm)								重量(g)	備考
	a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2		
5-18	2.95	3.15	11.67	11.65	12.35	10.45	3.86	3.85	0.5	1, 床A群
19	3.35	3.87	12.45	12.46	13.10	13.16	4.70	4.11	0.8	2, 床A群
20	2.78	3.15	11.55	12.41	12.79	11.57	3.85	3.85	0.7	3, 床A群
21	2.95	2.24	11.96	11.48	13.04	12.62	3.94	3.82	0.8	4, 床A群
22	5.80	6.26	11.75	11.37	13.07	13.16	3.53	4.35	1.5	5 + 18, 床A群+カマド西
23	3.66	3.60	13.12	12.59	14.00	14.00	3.01	3.00	1.1	6, 床B
24	3.58	4.74	13.60	14.10	15.32	13.40	3.20	3.30	1.3	7, 床C
25	4.00	8.00	13.10	13.45	14.60	12.39	3.05	3.44	1.8	8, カマド西
26	5.36	6.71	13.22	14.60	15.32	14.82	3.05	3.53	2.1	9, カマド西
27	5.31	5.06	12.60	12.60	13.55	13.14	3.38	3.42	1.3	10, カマド西
28	3.70	6.35	13.59	14.31	14.70	14.47	3.19	3.31	1.4	11, カマド西
29	5.01	6.52	12.40	12.82	14.15	12.22	3.50	3.35	1.6	12, カマド西
30	6.11	5.42	12.47	12.30	14.30	14.35	3.16	3.50	1.8	13, カマド西
31	6.19	6.00	14.23	14.71	16.04	12.81	3.41	3.30	1.9	14, カマド西
32	7.91	8.72	12.25	12.74	15.45	12.45	3.26	3.10	2.1	15 + 16, カマド西
33	2.65	4.76	12.39	11.56	13.50	13.30	3.02	3.39	0.9	17, カマド西
34	7.20	9.46	13.72	13.17	15.34	14.47	3.36	3.19	2.6	カ1, カマド西
35	7.75	6.74	12.00	9.16	14.01	13.45	3.61	3.21	2.0	カ2, カマド西
36	7.04	7.34	12.31	12.02	13.31	13.75	3.65	3.40	2.0	カ3, カマド西
37	4.92	7.00	13.56	13.55	14.67	14.39	3.06	3.06	1.7	カ4, カマド東
38	9.66	9.69	13.00	13.64	15.53	13.76	3.24	4.05	2.9	カ5 + カ13, カマド東
39	5.23	9.40	13.09	13.20	14.51	12.66	3.57	3.50	1.7	カ6, カマド東
40	8.90	8.00	12.21	13.21	14.61	13.41	3.63	3.80	2.5	カ7 + カ8, カマド東
41	6.55	7.39	14.15	13.33	15.32	13.87	3.00	3.07	2.1	カ9, カマド東
42	7.60	6.64	11.68	10.79	12.86	12.29	3.21	3.45	1.5	カ10 + カ14, カマド東
43	4.81	4.30	12.79	12.80	13.59	14.32	3.00	3.13	1.2	カ11, カマド東
44	5.34	7.64	12.85	14.22	14.80	14.10	3.43	3.41	2.0	カ12, カマド東
45	3.19	3.61	13.30	13.71	14.80	12.31	3.15	3.05	0.9	カ15, カマド東
46	5.79	4.91	13.05	11.89	13.54	12.90	2.81	3.54	1.3	カ16 + カ20, カマド東
47	3.10	2.76	14.31	13.41	14.66	13.69	3.20	3.24	0.9	カ17, カマド東
48	4.16	5.86	13.30	12.92	14.06	13.40	3.59	3.26	1.4	カ18 + カ19, カマド東
49	3.54	3.75	12.57	12.75	13.53	13.16	4.66	3.67	1.0	3BGr, 表採



第 15 表 網物錘石計測表 遺構图中的出土位置は表頭の No. と合致し、○で示した

(cm・g)

No.	幅	厚さ	長さ	重量	備考	No.	幅	厚さ	長さ	重量	備考
2-1	6.41	4.17	13.21	524	S1	10-1	5.52	4.79	10.9	511	S1
2-2	5.35	2.95	10.85	283	S2	10-2	6.59	4.37	10.18	431	S2
2-3	5.95	4.11	13.93	395	埋積土 2 区	10-3	5.93	4.65	16.3	764	S3
3-1	5.02	3.61	9.63	209	埋積土 1 区	10-4	6.24	4.69	14.5	583	S4
3-2	5.05	3.92	10.06	296	埋積土 1 区	10-5	6.53	4.53	15.5	661	S5
3-3	4.94	3.78	11.6	285	埋積土 1 区	10-6	5.59	3.81	13.4	336	S6
5-1	6.70	4.48	16.0	675	S1	10-7	6.15	4.13	15.8	582	S7
5-2	5.78	4.03	16.4	522	S2	10-8	6.45	4.88	15.3	735	S8
5-3	6.48	3.62	19.0	661	S3	10-9	5.77	5.42	16.0	797	S9
5-4	5.73	4.02	15.2	643	S4	10-10	5.62	3.40	16.9	494	S10
5-5	6.63	3.35	19.0	849	S5	10-11	5.34	3.19	9.63	235	S11
5-6	6.73	5.12	18.1	909	S6	10-12	7.15	3.98	15.6	624	S12
5-7					S8 + S7	10-13	5.84	2.43	14.4	365	S13
5-8	5.80	5.28	19.7	932		10-14	6.45	3.66	14.0	444	S14
5-9	5.12	4.58	17.5	582	S9	10-15	6.80	2.91	15.5	532	S15
5-10	5.52	3.94	14.3	487	S10	10-16	6.30	4.07	9.71	355	S16
5-11	6.92	4.24	17.4	859	S11						
5-12	4.55	3.04	11.83	222	S12						

参考・引用文献

1. 橋本澄朗 1995 「間仕切住居に関する覚書」『研究紀要第12号』栃木県立博物館
2. 栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
3. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』
4. 藤田直也 2003 『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区(権現山遺跡SG I区、杉村遺跡SG 1区 磯岡北遺跡SG 3区・SG 4区・SG 6区・SG 7区・SG 8区・SG11区・SG12区・SG13区・SG14区 西刑部西原遺跡2区・6区・7区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第274集 栃木県教育委員会、栃とちぎ生涯学習文化財団
5. 中村享史 2004 『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群(西刑部西原遺跡1・2・6区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 栃木県教育委員会、栃とちぎ生涯学習文化財団
6. 大塚雅之・土生朗治他 2007 『西刑部西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集(※西刑部西原遺跡A区) 宇都宮市教育委員会
7. 笹森健一 2007 「4 古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居」『住まいの考古学』学生社
8. 富川 努・土生朗治他 2008 『中島笹塚遺跡(A区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集(※西刑部西原遺跡C区含む) 宇都宮市教育委員会
9. 植木茂雄 2010 『西刑部西原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第329集 栃木県教育委員会、栃とちぎ生涯学習文化財団
10. 白崎智隆 2010 『西刑部西原遺跡(E区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第76集 宇都宮市教育委員会
11. 亀田幸久 2012 『東谷・中島地区遺跡群12 西刑部西原遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告第354集 栃木県教育委員会、(公財)とちぎ未来づくり財団
12. 亀田幸久 2013 『東谷・中島地区遺跡群16 西刑部西原遺跡(古墳・奈良・平安時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告第362集 栃木県教育委員会、(公財)とちぎ未来づくり財団
13. 今平利幸・三輪孝幸 2014 『西刑部西原遺跡(F区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第86集 宇都宮市教育委員会
14. 仲沢 隼・宅間清公 2014 『西刑部西原遺跡(H区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第88集 宇都宮市教育委員会

IV まとめ

(1) 土地利用の変遷

東谷・中島土地区画整理事業地は約137haに及ぶ広大な面積を占めるが、この中には12ヶ所の遺跡（古墳群を含む）が所在する。これらは東谷・中島地区遺跡群と総称され、その推定面積は約887,600㎡で開発予定面積の65%を占める程密度の高いものであった。このうち、西刑部西原遺跡は遺跡群の北東部に南北約800mにわたって細長く延び、推定面積は約138,000㎡と砂田遺跡に次ぐ面積であった。本遺跡は古代の集落跡を中心とするが南東部には琴平塚古墳群を内包し、東山道と推定される道路跡も調査された。なお、本区画整理事業に伴う県埋蔵文化財センターによる調査は1～14区に分割され断続的に計11年にわたって発掘調査が行われた。古墳群の1・2・6区で30,700㎡、3～14区の集落遺跡が26,500㎡である。また、これらと並行して宇都宮市による調査がA～H区で実施された。調査報告書等で調査面積が確認出来たのは、A・E～Hの約8,000㎡である。さらに、本事業地の東に接して所在する県道二宮・宇都宮線（通称砂田街道）の改良工事に伴いI～III区約900㎡が調査された。

従ってこれまでに66,100㎡程が調査されたことになる。調査によって得られた成果は旧石器時代から中・近世にわたる長期のものであるが、その主体は古墳時代後期以降の集落跡で、それ以前の遺構・遺物の分布は疎であった。

今次調査区の隣接調査区では旧石器時代の遺物が出土しているが、今次調査区での出土は無い。

縄文時代の遺物は各調査区で草創期～晩期にわたって少量づつ見られるが、今次調査区内では石鏃が1点と時期不明の土坑が1～2基認められたに過ぎない。

弥生時代の遺構と遺物についても他の調査区で僅かづつの出土があるものの、当調査区では未確認である。

古墳時代前期の遺構・遺物は、北西の砂田姥沼遺跡で3軒程の住居跡が認められたが、それぞれ時間差を持ち集落と呼べるもので無かった。

本遺跡群内でも古墳時代中期以降の集落の形成が顕著となるものの、遺跡群の西寄り为主体であり、本遺跡の所在する東側の地区では古墳時代の後葉から奈良時代の前葉にかけて急激に発達する。その後も本遺跡の東寄りから東方の地域に向かって奈良・平安時代の集落が高い密度で分布するようになる。本遺跡の近隣の調査区と比較すると、遺跡の北西端に位置する今次調査区では古墳時代後期の住居跡が主体を占めるが、南東のF区やその東のE区、さらには調査区東方のH区でも奈良・平安時代の住居跡の存在が増す傾向が認められる。しかし、9世紀代では8世紀代に比べると著しい減少となり、10世紀代には集落は消滅する。

中世の遺構・遺物は本遺跡群内においても所々で確認されているが、ここ西刑部西原遺跡では遺構は確認されなかった。しかし、4区からは鎌倉時代（13世紀前半～中葉）と推定される和鏡「群蝶双雀鏡」の出土があり、何らかの土地利用があったと推定し得る。

近世には農耕地（水田・畑地）として利用された為か目立った痕跡はのこされていなかった。

(2) 特色ある遺構・遺物について

遺構 今次調査区では、堅穴住居跡12軒、土坑3基、溝跡1条、小穴約30基などを確認した。

堅穴住居跡は、調査区外に延びるものや攪乱に切られるなどして全体の規模・形状を知り得るのは半数の6軒（SI-02・03・05・08・10・11）である。確認した住居跡のうちカマドが遺存したのは8軒で、SI-06

が東辺の南寄り、09が東辺北寄りに認められた他は北辺の中程に設けられていた。SI-06のカマドは北に造り替えた為か煙道部分のみが遺存、SI-09は、北東隅に設けられていたものが後世の溝跡SD-02に切られ遺存状態が悪く詳細は判然としない。なお、北を中心にした場合の各住居跡の主軸方位はN-21°-E~N-6°-Wを示し、N-14°~21°-EのSI-01・03・08・12とN-7°-E~N-6°-WのSI-02・04~07・09~11の2群に大別される。

竪穴の規模は前記の状態から明確にし難いものもあるが、東西長7.5mのSI-06が最大で、一辺6mのSI-01・03・05がこれに次ぐ。最小は2.5×2.7mのSI-09となるが遺存状態が不良で比較の対象とは出来ない。

平面形は概ね方形であるが、SI-11は東西長4.5~5m、南北長4mの不整形で、支柱穴の確認されたもの(SI-02・03・05・06・08・10・11)のなかで唯一2本柱であった。また、南壁際に入出口の施設と見られる小穴が設けられていたもの(SI-02・05・06・10)が見られ、SI-02・06は掘り直しが認められた。なお、SI-02は支柱穴や貯蔵穴、壁溝にも掘り直しが認められ建て替え拡張が行われたと判断される。また、SI-06もカマドの移動や入出口の小穴の掘り直しから改造が推察されるもの支柱穴にはその存在が確認出来なかった。支柱穴の平面形を見るとSI-02・03・08・10・11は方形に近く、SI-06の入出口の小穴や間仕切に伴う小穴も同様の形状であった。鋤のような掘削具で掘ったものと考えられる。

床面はいずれも粗掘りの後ローム粒・塊主体の土で整地したもので、床面下に幾分の掘り込みが認められた。いずれもほぼ平坦で堅く締まっていた。SI-02・11は床面の改修が見られ、SI-01や05は間仕切溝に改修が確認されたことから、部分的な改造が行われたと考えられる。また、壁溝はSI-03・07を除き明瞭に設けられていたが、SI-07は西辺に部分的に認められ、SI-10は南辺の溝を確認出来なかった。

所謂間仕切溝は、一辺5m以上の比較的大型の住居跡に設けられていた。SI-01は西側の壁下より内側に向かって2条設けられており、それぞれ支柱穴に向かって延びると推察されるが、南と北ともに2回の改修が見られた。SI-03は東辺2条、西辺1条を確認し、いずれも支柱穴に向かって延びる。西辺の南寄りにも設けられていたが、SI-02との重複により失われたものと推察される。また、東辺北寄りの溝は西辺のそれよりやや南寄りに設けられていた。これは北東隅の貯蔵穴を避けて空間を設けた為と考えられる。SI-05は東辺、西辺とも各2条の溝が内側に向かって延びるがともに支柱穴には連ならない。また、東・西とも北寄りの溝に掘り直しが確認された。SI-06は東辺より内側に延びる溝を1条確認したが、これは支柱穴には連ならないものの専用の小穴が設けられていた。なお、南辺に間仕切溝を確認出来なかったが、支柱穴を結ぶ線上に同様の小穴が認められ、関連する施設と推測される。SI-08も東辺・西辺より各2条の溝が内側に向かって延び、東辺北寄り以外の3条はほぼ支柱穴に連なる。この住居跡も北東隅に貯蔵穴が設けられていることから、SI-03同様に必要な空間を確保する為に北東の間仕切溝をやや南寄りに設けた為と考えられる。

貯蔵穴はSI-02・03・05・06・08・10・11に設けられていた。SI-02・03・08・11は北東隅(カマド右脇)、SI-05は南辺中央に張り出し、SI-06は南東隅(旧カマド右脇)、SI-10は北西隅(カマド左脇)に設けられていた。カマドの右脇となる北東隅に設けられたものが主体を占める。SI-02・08の貯蔵穴からは目立った遺物の出土は無かった。SI-03はほぼ完形の土師器甕が2個体、SI-05も内部よりほぼ完形の土師器甕2個体、土師器杯1点、東脇より網物鏝石が12点程まとまって出土した。SI-06は東脇より完形の土師器杯が1点、SI-10も西脇より完形の土師器杯が1点、SI-11は内部よりほぼ完形の土師器杯が2点出土した。このように比較的良好的な状態で遺物が出土しているが、床面に焼土とともに土器類が多く遺存していたSI-08の貯蔵穴より遺物の出土が無かったのは後世の耕作に関連する溝と重複していた為と考えられる。

床面もしくは埋積土に焼土や炭化物が遺存し、火災住居跡と推察されるのはこのSI-08の他SI-01、10が

ある。SI-01 は、南西隅の床面近くの埋積土中に焼土が遺存したものの炭化材などは認められなかった。

前記のSI-08 も壁際の床面の所々に焼土の遺存が認められたが、炭化物（材）は全く認められなかった。逆にSI-10 は、北西隅の貯蔵穴脇と南東の柱穴P4の脇に炭化材が各1点認められたが焼土類は遺存しなかった。

カマドは前述の通り、SI-02・03・05・06・08～11に設けられていた。これらのうちSI-06は東壁、09が北東に設けられていた他はいずれも北壁の中程に設けられていた。SI-02は確認当初は焼土が広範囲に認められ遺存状態が良好と思われたが、廃絶時の破壊儀礼によるものか支脚も遺存せず、袖部もあまり明瞭で無かった。SI-03は、カマド内に設置された土師器甕が2個遺存し、それぞれの甕の下には礫を使用した支脚が遺存した。本跡は南西部がSI-02に切られていて住居廃絶時の状況は明確で無い。しかし、カマド周辺や貯蔵穴内よりほぼ完形の土師器が出土した。焼土や炭化物の遺存は無く、火災住居跡で無いと思われるが多数の什器をのこして転居している。カマド内に2個の甕が遺存したことから居住時のままかと思われたが、両方の甕が焚口側に傾斜し、その下の支脚が倒れていたことから、少なくとも焚口部のブリッジは破壊したものと推察される。SI-05も前述の如く、カマド周辺から南辺の貯蔵穴（張り出しピット）の内外などからほぼ完形の土師器が多数出土した。本跡の場合も火災の痕跡は認められず、何らかの理由で什器をのこしたまま転居したと考えられる。この住居跡のカマドは、焚口部に柱状の河原石を立てその上にやや大振りの河原石を掛け渡したものである。しかし、住居の廃絶に際しては焚口部のブリッジを手前に落下させ、支脚も除去されていた。この焚口部のブリッジの一部がカマドの東裾より出土しており、後世に落下したもので無く、意図的に破壊したものと判断した。また、カマドの調査を進めるとその両脇より白玉がカマド構築材の粘土に混じった状態で30点程出土し、東側からは手鎌（穂摘具）も出土した。さらに東半部の床面からも白玉が数点出土している。残念ながらカマド脇の白玉は全点の出土位置を捉えることが出来なかったが、概ね2ヶ所よりまとまって出土した。出土当初は40点程と見られたが、洗浄後の観察から分離したものを接合した結果32点となった。この出土状態より推して、住居＝カマドの廃絶に伴う祭祀が行われたものと推察された。SI-06のカマドは煙道部のみの遺存であり、SI-08・09も後世の溝に切られていて痕跡のみの調査となった。SI-10は、ほぼ全体が遺存していたが支脚は遺存しなかった。SI-11のカマドは、北壁を逆U字型に切り込んで構築され、礫使用の支脚が倒れていた。また、焚口部の両端よりほぼ完形の土師器甕が各1点出土した。当初焚口部の補強材かと思われたが、その場合、口辺部を下にして倒位で使用する例が多いが、本跡の場合それぞれ口辺部を奥に向けて横たわった状態で出土し、補強材では無かったと思われる。

土坑は3基確認したがいずれも遺物の出土は無く、その性格を示すような特徴を持たない。SK-01は埋積土から縄文時代に属すると推察されるものの、他は明確に難い。

溝跡は2条確認し、SD-01は古代の所産と推定されるが、SD-02は耕作に伴う根切溝もしくは地境溝と推定されるものであった。

小穴は30基程確認したが、構造物として捉えることは出来なかった。P21A・Bより土師器片が出土し古墳時代の遺構と推察されるが、他の多くも同様の埋積土で該期の遺構と思われる。なお、P16・26・27は深さが41～52cmと他に比べて深く、斜めに掘り込まれており、異なる性格のものと考えられる。

遺物 今次調査区で出土した遺物の大部分は土師器で、坏、皿、鉢、小型甕、甕、小型甌、甌、手づくね土器などがある。坏類の多くはウルシ処理が施されたものが主体を占め、一部黒色処理のものも認められた。また、外面未整形のものSI-01（4）、SI-03（3・5～7）、SI-10（1）も見られ、成形時の粘土紐巻き上げ痕が目立つ。SI-07（1）、SI-08（8・9）のように、焼成前に底部外面にヘラ記号の印されたものが認

められた。

SI-11では粗製な小型甕や鉢、小型甕、坏類に混じって、粗製な皿が3点(9・10・11)出土した。

甕はSI-03・05の貯蔵穴より各2個体(03-15・16、05-12・13)出土しており、この程度の住居規模での常備個数かと思われる。なお、鉢と同程度の小型の甕SI-03(10)、SI-11(14)も見られた。

甕類は長胴形のもが主体を占めるが、胴張形のものSI-07(4)、SI-10(5)、SI-11(19)も見られる。また、外面の整形は概ねヘラ削りによるものであるが、ハケ整形のものSI-10(5)、SI-11(18)も含まれる。

鉢類は胴が球形のものSI-03(11)、SI-08(17)と筒形のものSI-11(12・13)が見られる。

手づくね土器はSI-01(5)、SI-03(8・9)、SI-05(11)、SI-08(10～16)、SI-10(4)などがあり、径8～10cm程のものが多いが、径3.5cmと小さなものSI-08(11・12)も見られた。

須恵器はいずれも小片で図示し得たものは5点で、甕の口辺部がSI-02(11)、甕の体部がSI-08(20)、高台坏がSI-09(2)、坏がSI-08(19)、SI-10(6)より出土した。

鉄製品はSI-05のカマド東脇より出土の手鎌(穂摘具・15)で、ほぼ方形である。両端に目釘孔があるが木質部分は遺存しなかった。部分的に鏃状のもの付着が見られた。

石製品は、砥石、白玉、網物鎌石、石蔵がある。砥石はSI-06(5)からの1点のみで、重量1,142gと比較的大型のものであった。砂岩製で使用痕が顕著である。

白玉は計32点を図示したが、SI-05(49)は住居跡西脇からの表採である。出土地が近接し、他の遺構からの出土が無かったことから、合わせて図示した。これらはカマドの東・西両脇よりまとまって出土し、一部床面より7点(18～24)出土した。出土当初は40点程と見られたが、洗浄し実測に入る段階での観察で、剥離面に全く加工が無く、明らかに同一個体と判断されるものを接合した結果、合計32点となった。本来、径10～16mmの管玉状に作製し、それを分割したものであり、分割後に整形が施されている。しかし、当時の人々にとって分離したものと分割したものの差がどの程度意識されていたものか判然としない。前述の如く、住居の廃絶に伴いカマドの破壊と祭祀を行ったものと推察され、土玉も1点(16)これらに混じって出土している。また、前記の鉄器も、あるいは置忘れでは無くこれらの祭祀に伴うものである可能性も否めない。

石材は足尾山系の粘板岩で、群馬県三波川系の石材の供給が停止後のものであろうと考えられ、6世紀末～7世紀代の所産とされる[※]。西刑部西原遺跡の他の調査区や、本遺跡群内の他の遺跡から、白玉や石製模造品の出土が報告されているものの、本跡の場合はその末期的事例とならうか。また、今後は白玉の整理に際して接合は十分に注意したいと反省している。

石製品ではないが、自然石を利用した網物鎌石と考えられるものが、SI-02・03・05・10より計33点出土した。殊に、SI-05は前述の通り、貯蔵穴の脇より11点がまとまって出土している。また、SI-10は堅穴内に計16点が散在していた。なお、両者を比較すると、SI-05の平均重量は667g(最小の1点を除くと712g)、SI-10の平均重量は529gで、SI-05の方が大振りのもが多かった。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主のUR都市機構、株式会社北関東マツダをはじめ、調査・報告書作成についてご助力とご指導を賜りました関係各位及び機関に深謝申し上げる。

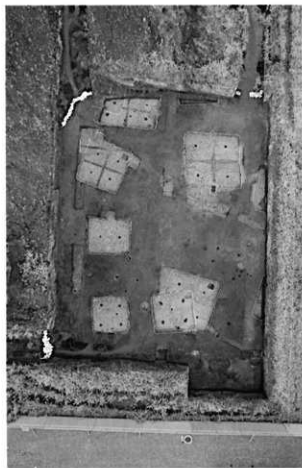
※注 白玉に関しては栃木県立なす風土記の丘資料館館長・藤原祐一氏のご教示によるが、理解不足や表現に誤りがあれば筆者の責に帰す。



A. 調査区全景空中写真（手前G区、奥H区、西より）



B. 調査区全景空中写真（中央より右側奥の林までが本遺跡、北より）



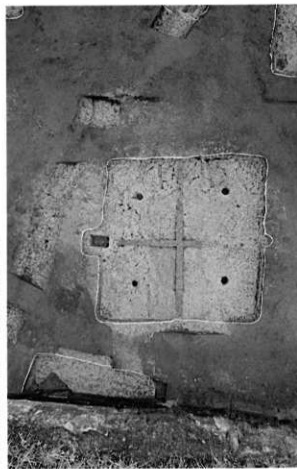
B. 調査区全景垂直写真(右が北)



D. SI-08・09・06・12 垂直写真(右が北)



A. 調査区全景空中写真(東より)



C. SI-05 垂直写真(下が北)



B. 調査区全景（北より）



D. 調査区全景南東部（南東より）



A. SI-02・03・10・11 垂直写真（下が北）



C. 調査区全景（南東より）

図版 4



A. 調査前の状況（北東より）



B. 同前近景（北東より）



C. SI-01 焼土確認状況（北より）



D. 同前近景（北より）



E. SI-01 完掘（南より）



F. SI-01 完掘・土層（西より）



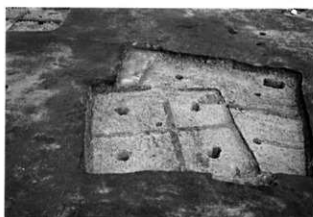
G. SI-01 掘方（南より）



H. SI-02・03 土層（左03・右02、西より）



A. SI-02 完掘 (南より)



B. SI-02 掘方 (南より)



C. SI-02 カマド確認時 (南より)



D. SI-02 カマド完掘 (南より)



E. SI-02 カマド掘方 (南より)



F. SI-02・03 土層 (左02・右03、南より)



G. SI-03 完掘 (左手前02、南より)



H. SI-03 掘方 (左手前02、南より)



A. SI-03 貯蔵穴 (南より)



B. SI-03 カマド確認時 (南東より)



C. SI-03 カマド内の土器 (南より)



D. SI-03 カマド内の土器 (南東より)



E. SI-03 カマド完掘 (石は支脚、南より)



F. SI-03 カマド掘方 (南より)



G. SI-04 完掘 (南より)



H. SI-04 掘方 (南より)



A. SI-05 完掘 (南より)



B. SI-05 土層 (南より)



C. SI-05 掘方 (南より)



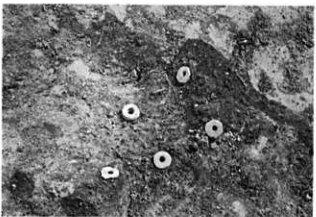
D. SI-05 張出しピット (南より)



E. SI-05 遺物出土状態 (南より)



F. SI-05 張出しピット遺物出土状態 (南より)



G. SI-05 北東の白玉出土状態 (南西より)



H. SI-05 張出しピット脇の網物銼石 (南より)



A. SI-05 カマド確認時（南より）



B. SI-05 カマド完掘（南より）



C. SI-05 カマド焚口部（南より）



D. SI-05 カマド掘方と焚口部石材（南より）



E. SI-05 カマド掘方（南より）



F. SI-05 カマド脇鉄器出土状態



G. SI-06・12 土層（南より）



H. SI-06 土層（東より）



A. SI-06・12 完掘 (右06・左12、南より)



B. SI-06・12 完掘 (左手前12、西より)



C. SI-06・12 掘方 (右06・左12、南より)



D. SI-06・12 掘方 (左手前12、西より)



E. SI-06 旧カマド完掘 (西より)



F. SI-06 旧カマド掘方 (西より)



G. SI-07 完掘 (南より)



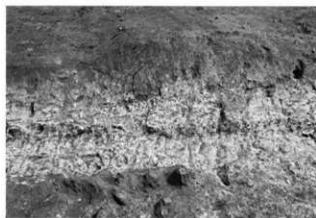
H. SI-07 完掘 (西より)



A. SI-08 土層 (東より)



B. SI-08 完掘 (南より)



C. SI-08 カマド確認時 (南より)



D. SI-08 掘方 (南より)



E. SI-08 遺物出土状態 (南東より)



F. SI-08 上層の遺物出土状態 (南より)



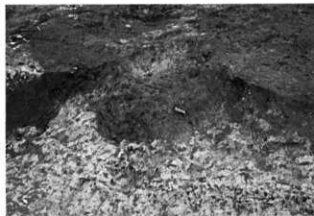
G. SI-08・09 土層 (北より)



H. SI-09 土層 (北より)



A. SI-09 完掘 (南西より)



B. SI-09 カマド確認時 (手前SD-02、南より)



C. SI-09 カマド土層 (南西より)



D. SI-10 土層 (西より)



E. SI-10 土層 (南より)



F. SI-10 完掘 (南より)



G. SI-10 掘方土層 (南より)



H. SI-10 貯蔵穴・遺物出土状態 (南より)



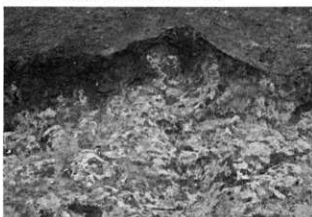
A. SI-10 遺物出土状態 (南より)



B. SI-10 遺物出土状態 (南より)



C. SI-10 カマド完掘 (南より)



D. SI-10 カマド掘方 (南より)



E. SI-11 土層 (西より)



F. SI-11 土層 (北より)



G. SI-11 完掘 (南より)



H. SI-11 掘方 (南より)



A. SI-11 掘方 (西より)



B. SI-11 遺物出土状態 (南より)



C. SI-11 遺物出土状態 (南より)



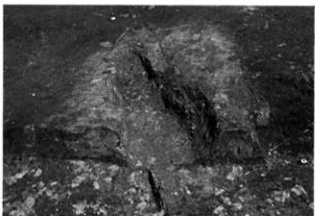
D. SI-11 カマド土層 (南西より)



E. SI-11 カマド土層 (北東より)



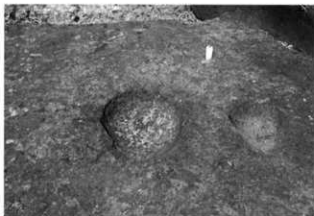
F. SI-11 カマド完掘 (南より)



G. SI-11 カマド袖断面 (南より)



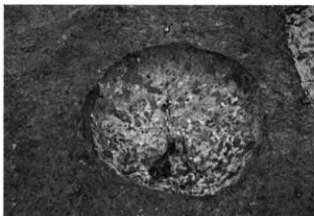
H. SI-11 カマド掘方 (南より)



A. SK-01・P-14 完掘 (南より)



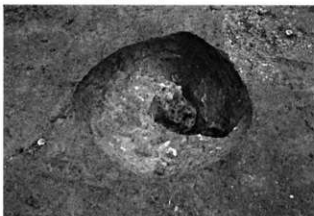
B. SK-01 土層 (南より)



C. SK-02 完掘 (南より)



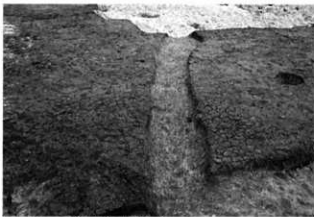
D. SK-02 土層 (西より)



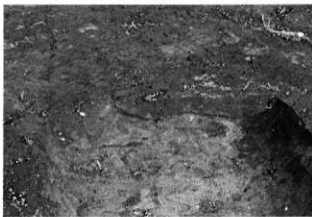
E. SK-03・P32 完掘 (南より)



F. SK-03・P32 土層 (南より)



G. SD-01 完掘 (東より)



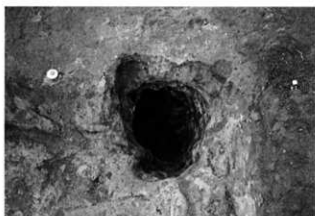
H. SD-01 土層 (南より)



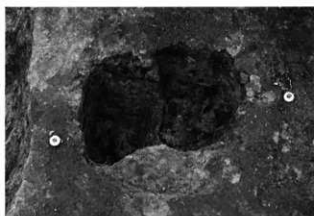
A. SD-02 土層 (西より)



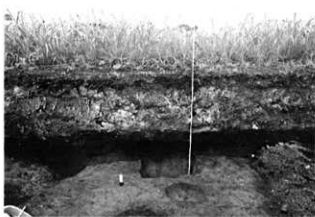
B. P-16 土層 (北より)



C. P-16 完掘 (北より)



D. P-21A・B 完掘 (西より)



E. 基本土層 調査区東 (西より)



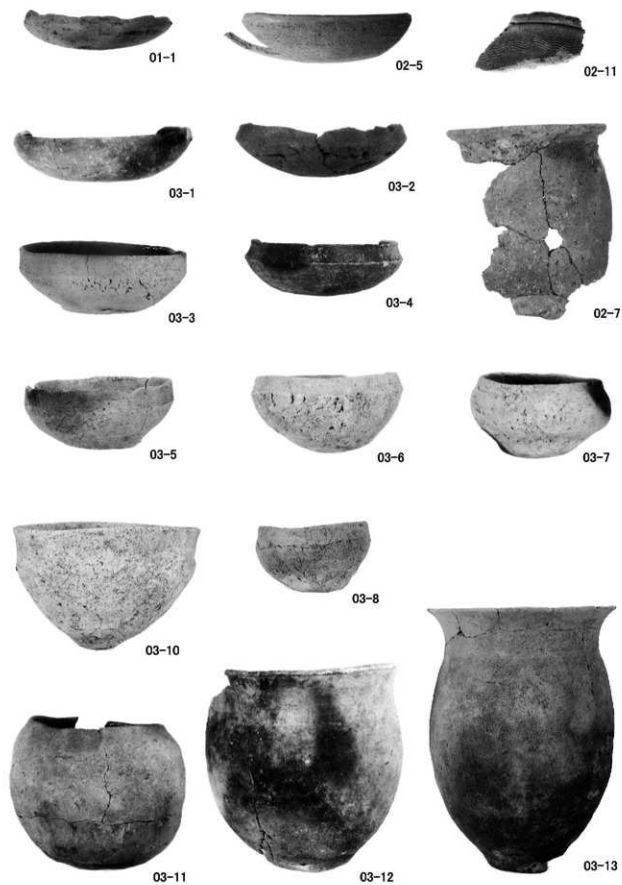
F. 基本土層 調査区東近景 (西より)



G. 調査状況 (南東より)



H. 調査状況 (北東より)





03-14



03-15



04-1



05-1



05-2



05-3



03-16



05-4



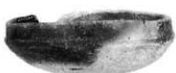
05-5



05-6



05-7



05-8



05-9



05-10



05-11



1/2

05-15



1/2

05-17

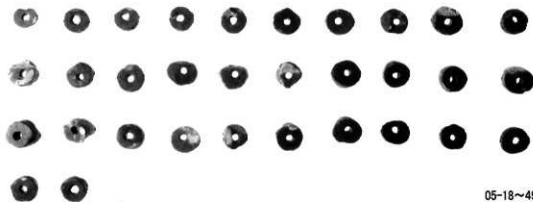
05-17R



05-12

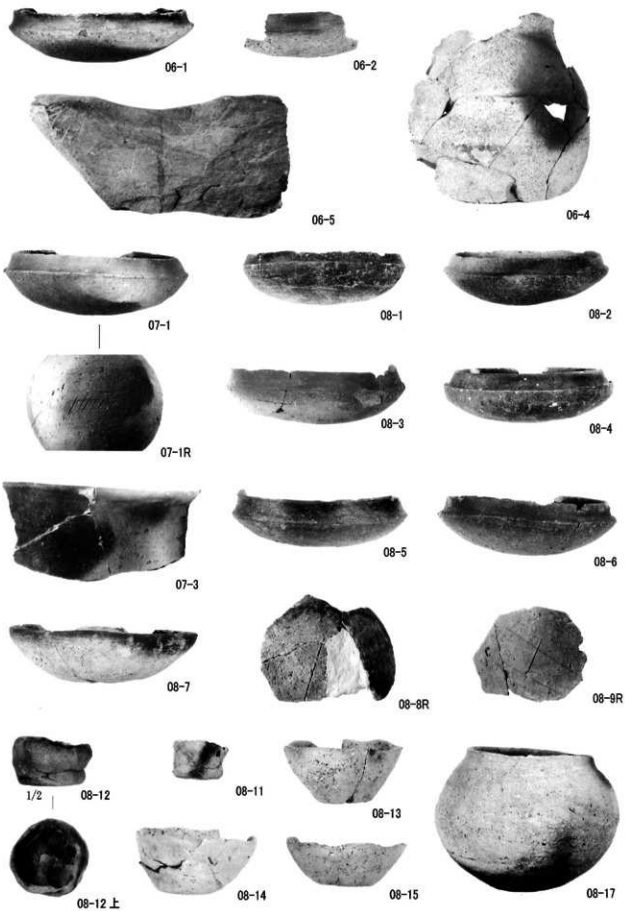


05-13

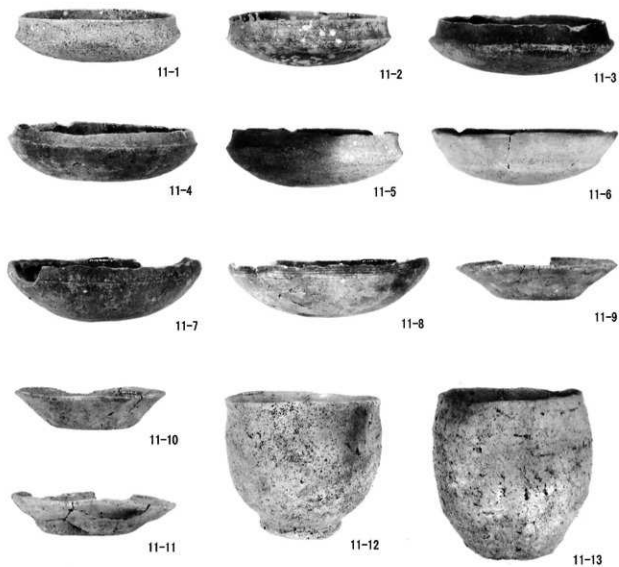
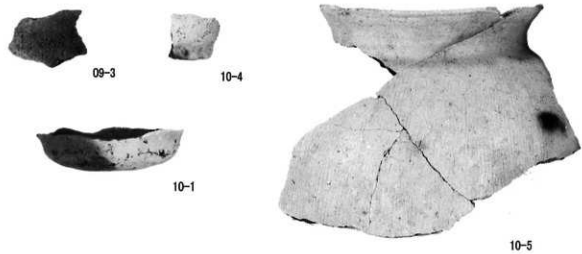


1/2

05-18~49
(白玉 1~32)



SI-06 ~ 08 出土遺物





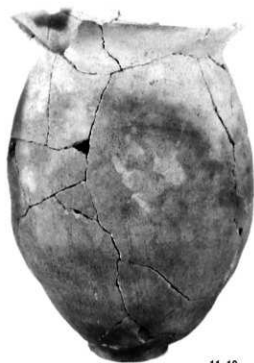
11-14



11-15



11-17



11-18



11-19

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしおきかべにしはらいせき じいく							
書名	西刑部西原遺跡 (G区)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第89集							
編著者名	前原義之・水野順敏・柏崎広伸							
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦 2015(平成 27)年 1月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
にしおきかべにしはらいせき 西刑部西原遺跡 (G区)	うつのみやし 宇都宮市インターパーク 4丁目 2-2	09201	4354	36° 29′ 43″	139° 54′ 44″	20140715 ? 20140831	約 789 ㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西刑部西原遺跡	集落跡	・縄文時代 ・古墳～奈良時代	・土坑 ・堅穴住居跡, 溝跡, 土坑, 小穴	・石鎌 ・土師器, 須恵器, 鉄製 品, 石製品(白玉, 砥石)		・古墳時代後期の住 居跡のカマド周 辺より30点以上白 玉が出土し、祭祀 的行為が推察され る。		
要 約	・古墳時代後期後葉から奈良時代前葉の住居跡が12軒確認された。南のF区や東のH区のような奈良時代後葉～平安時代の住居は認められなかった。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 89 集

西刑部西原遺跡 (G区)

発行年月日 2015 (平成 27) 年 1月 31日

編 集 株式会社 日本窯業史研究所
〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112
TEL 0287-93-0711

発 行 宇都宮市教育委員会文化課
〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5
TEL 028-632-2764

印 刷 下野印刷 株式会社
〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11
TEL 028-622-6953